

田 佛 遺 跡

福岡県筑後市北牟田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 5 集

1988

筑後市教育委員会

田 佛 遺 跡

福岡県筑後市北牟田所在遺跡の調査

1988

筑後市教育委員会

序

三瀬郡三瀬町全町土地改良区による圃場整備事業の中から、この度また古代の住居跡を発掘することができました。昭和59年の瑞王寺古墳や前津中の玉遺跡等と一連のものとして学術的な意義も少なくないものと思われます。

無事に発掘作業を完了し、ここに報告書作成の運びに到りましたことを同慶に存じ上げる次第でございます。それにつけても、今回もまた作業は師走の寒風の吹きさらしさ中に行われましたわけで、作業に当つて下さいました方々の御苦労に深甚の謝意を表するものでございます。

かくして、郷土の地下に千年もそれ以上も眠り続けた老人の生活が今まで明らかになり、出土品は郷土資料館に大切に保存展示され郷土の祖先の息づかいを感じ得ることは、ほんとうに意義深いことと存じます。いつまでも語りつぎ伝えつかねばなりません。

御理解御協力下さいました三瀬地区土地改良区の皆さんに厚くお礼申し上げると共に、南筑後教育事務所の御指導御援助、特に川述先生の終始変らぬ研究への情熱と陣頭指揮に、万謝申し上げ、報告書を提出する次第でございます。

昭和63年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 中島栄三郎

例　　言

1. 本書は、筑後市が昭和62年度に緊急発掘調査を実施した田佛遺跡の報告書である。
2. 調査に要する費用は県農政部と筑後市が負担し、発掘調査は福岡県教育委員会の援助を得て筑後市教育委員会が実施した。
3. 遺物整理は、福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導により九州歴史資料館で行った。写真撮影は遺構を川述昭人、遺物は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導により須原悦子氏が撮った。空中写真はPHOTOオオツカが撮影した。遺構の実測は川述、飛野博文、田中康信が行い、遺物の実測は平田春美、若松三枝子氏にお願いし、中間研査、飛野氏の援助を得た。石器の実測は小田和利氏にお願いした。挿図の製図は豊福弥生・鶴田佳子氏が担当した。
4. 本書の執筆と編集は川述昭人が担当した。

本　文　目　次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 調査の内容	3
1 壑穴住居跡	4
2 壑　穴	49
3 土　壙	49
4 周溝状遺構	51
5 堀立柱建物	59
IV おわりに	59

I はじめに

田佛遺跡は三瀬地区県営ほ場整備事業の実施に先立って、緊急に発掘調査を実施したものである。昭和62年度当初における関係課との協議では、当該地区的事業実施は63年度の夏工事であるため、63年7月以降に発掘調査を実施するということで了解済みであった。ところが、62年の8月に入り、NTT株の売却に伴う政府の内需拡大策の一環として、通常1地区1期のみのは場整備事業が本年度は地区によって1地区2期の工事を行う事となった。このため来年度事業実施予定の三瀬地区北牟田のは場整備事業は、1年繰り上げて実施することとなった。

早速、県教育委員会と筑後市教育委員会とで現地調査を行い、事業地区内に作付けされていない部分が若干あることを確認し、改良区へ試掘調査の協力要請を行った。9月中旬に重機を用いた試掘調査を実施し、住居跡が広範囲に所在することが明らかとなつたため、発掘調査費用と、調査終了日時について県農政部、県・市教育委員会で協議を行つた。調査費用は県農政部が負担し、事業費の農家負担分に相当する25%分については筑後市が予算措置した。

イチゴ苗の移植や大豆収穫のはば終えた11月16日から重機による遺構検出作業を開始し、発掘調査は11月24日～12月25日までの間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者 築後市教育委員会

教育長 中島栄三郎

社会教育課	課長	江里口 充	社会教育係	光延 久幸 <small>(文化財担当)</small>
	社会教育係長	江崎 仁淳	同	永松 三夫
	係	松尾恵美子	体育係長	山口 逸郎
	同	高井良宜徳衣	係	本村 正晴
	同	下川 広志	同	田中 紀彦

調査担当者 福岡県教育庁南筑後教育事務所 社会教育課 技術主査 川述 昭人

このほか、遺構実測は県文化課技師飛野博文氏、瀬高町教育委員会田中康信氏の援助を頼んだ。筑後市文化財専門委員の佐々木四十臣、土地改良区理事長内田保氏、西牟田地区役員永田昇氏、区長田島隆義氏をはじめとする関係各位のご理解とご協力により調査を無事終了することができた。記して感謝の意を表します。

(発掘調査参加者名) 愛川一枝、西坂ヨシエ、清水早苗、大坪慶子、渡辺章子、虻川町子、永田明子、永田キサエ、田島ひろ子、田島洋子、田島春子、丸山弥生、加藤礼子、小塙詔子、松延秀子、近藤恵子、永井千代子、田島富士子、永田昇、田島守、田島正美、田島信義、山口靖直、田島勝記、田島静岡、佐々木四十臣、坂本嵩、渡辺水春



1. 清導寺古墳(十連寺古墳)
 2. 十八銭龜遺跡
 3. 瑞王寺古墳
 4. 石人山古墳
 5. 弘化谷古墳
 6. 長原山遺跡
 7. 田佛遺跡
 8. 藏敷東野屋敷遺跡
 9. 蔴敷東野屋敷遺跡
 10. 欠塚古墳
 11. 前津中ノ玉遺跡
 12. 前津遺跡
 13. 汗遺跡
 14. 一條町囲
 15. 羽大塚町囲

第1図 遺跡位置図(1/25,000)

II 位置と環境

せんぶつ
田佛遺跡は福岡県筑後市大字北牟田字田佛に所在し、筑後市の北西端部にあたる当該地は三瀬町との行政境に位置している。

筑後市は福岡県の南部、筑後地区のほぼ中央に位置し、北の久留米市へは12km、南の大牟田市へは21kmの距離にある。筑後平野を南北につなぐ国道209号線添いに発達した市街地は、江戸時代の宿場跡や集落、一里塚等の名残りをわずかにとどめている。

市の南部は、蛇行して有明海へと注ぐ矢部川を挟んで山門郡瀬高町と接している。

市の北部は、八女市山内を東端とし、西は三瀬郡三瀬町西牟田までの10数kmに及ぶ八女丘陵が東西に細長く延びている。この八女丘陵には東から立山丸山古墳、釣崎1・2・3号墳、鶴見山古墳、善藏塚古墳、乗場古墳、筑紫の君磐井の奥津城である岩戸山古墳、神奈無田古墳、そして西端部には石人山古墳等の前方後円墳が点在している。筑後市の東端部に位置する石人山古墳の西方約1kmには、堅穴系横口式石室を内部主体として、珠文鏡や木心鉄板張輪鏡、家形埴輪などを出土した瑞王寺古墳（註1）がある。さらにその西北2kmの八女丘陵西端部には清導寺古墳（十連寺古墳）が所在する。

田佛遺跡は八女丘陵西端の裾部近くに位置したものであり、周囲の田面との比高1m弱の標高9.5m程の低台地上に集落が営まれている。古墳時代中期という年代の住居跡群は東方2kmに所在する同時期の石人山古墳の被葬者とのつながりを考える上で興味深いものがある。

註1 「瑞王寺古墳」筑後市文化財調査報告書 第3集 筑後市教育委員会

III 調査の内容

遺跡は八女丘陵の西端部に近く、周囲の田面との比高約1mを測る標高9.5mの舌状台地上に位置する。遺構は東西80m、南北200m程の範囲に広がっており、東端部近くは削平のため消失している。発掘区北側の縁辺部は1m強の垂直に近い段差があり、低湿地となっている。

調査は、ほ場整備事業に伴って当該地が削平されるため実施したものであり、この結果、弥生時代の堅穴住居跡8軒と、円形・方形周溝状遺構8基、落とし穴と思われる方形土壙7基、古墳時代中期の堅穴住居跡14軒と掘立柱建物3棟が検出された。

1. 竪穴住居跡

1号住居跡（第2図、図版3・4）

平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸7.0m、短軸6.8m、壁高35cmである。柱穴は規則的な4本柱であり、柱間は4.15mを測るがP3-P4は4.3mと若干長い。柱穴の深さは50~60cmで、底径12~30cmを測り、いづれも段を有する。四壁には深さ5cm程の壁溝が巡る。

カマドは北東壁の中央部につくものと思われ焼成部と見られる30cm×30cmの範囲の床面が焼け硬化している。この左右には瓶が各1個体ずつ横転しており、また赤色焼土部分の壁には壁溝が途切れている点からもうかがえる。

カマドと反対側の壁際中央部には深さ35cm程の長方形土壙があり、土師器が検出された。また南東壁中央部には浅い摺鉢状の掘り込みがみられる。主軸はN-45°-Eである。住居跡の年代は出土遺物から5世紀中頃と思われる。

出土遺物（第3図、図版14）

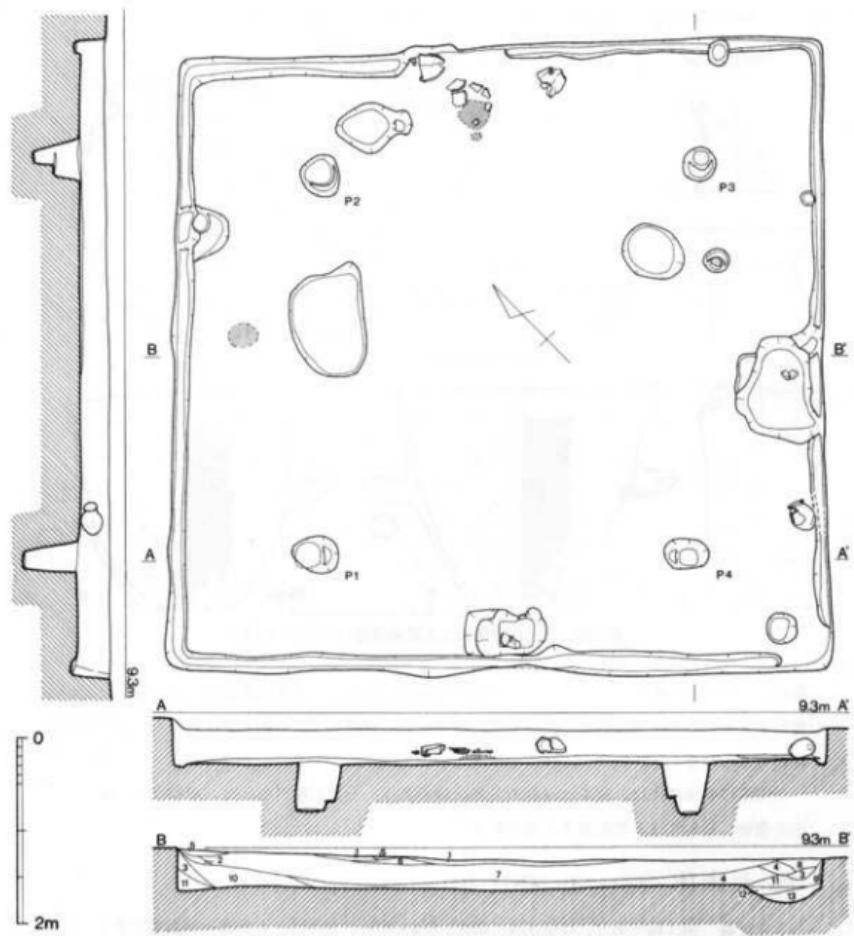
須恵器 1は甌の口頸部の小片であり、口縁部内面にわずかに段がつく。口縁部と頸部の境は凹線があり、頸部上端はとがり気味となる。頸部は櫛描波状文を施している。復原口径9cm。陶邑I型式3段階に比定される。

手捏土器 2は短い脚のつく土器であり、上部は變形土器がつくものであろうか。

土師器 高杯3は体部と底部の境に屈折面をもつものであり、口縁部は外反する。碗4は口縁部が直立気味にのび、端部をわずかに外反させる。外面の体部下半はヘラ削りし、内面は一部ヘラ磨きしている。5は小型丸底土器であり、器表の剥落が著しい。6は甌であり、口縁部は大きく外彎し、球形状の胴部を有する。外面はハケ目、内面はヘラ削り調整する。口径18.2cm、器高28cmである。7、8は瓶であり、この他にあと1個体分出土している。7は胴部中位より僅か上方に細味の把手がつく。底部は焼成前に円孔を開けている。口縁部に内傾する平坦面がつく。外面は目の粗いハケ目が、内面は荒いヘラ削りする。口径28.8cm、器高24.8cm。胴部の対称な位置に黒斑がつく。8は胴部中位に細味の把手がつくものである。外面は目の粗いハケ目、内面は荒いヘラ削りする。口径23.5cm、器高24cmであり若干歪つてある。9は断面方形の支脚であり、端部を欠損している。

2号住居跡（第4図、図版3・4）

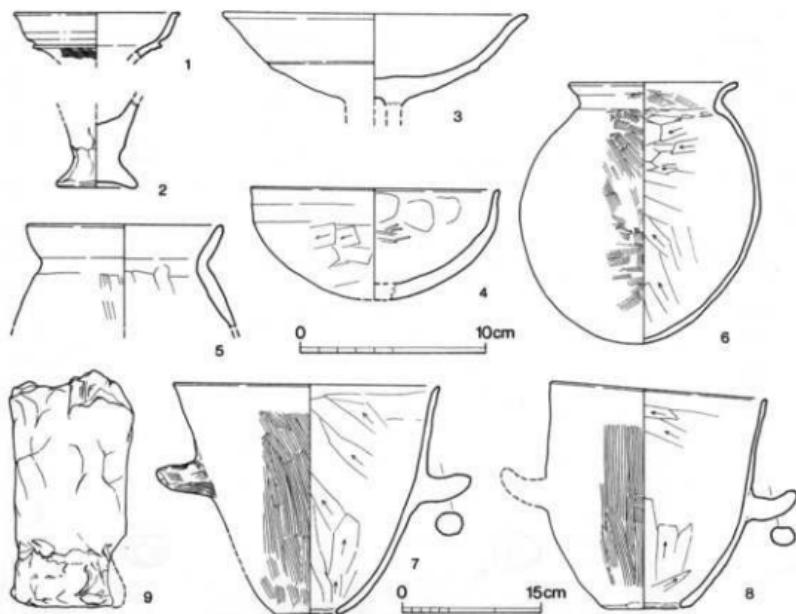
発掘区中央部の北側端部近くから検出された方形の住居跡であり、規模は長軸（東西壁）6.9m、短軸（南北壁）6.65m、壁高50cmを測る。柱穴は規則的に位置した4本柱であり、柱間は東西間2.6~2.75m、南北間2.9~3.05mを測り、深さは55~75cm、底径20cmである。住居跡の西側



第2図 1号住居跡実測図(1/60)

コーナー部分には一部途切れるが、四壁には深さ5cm程の壁溝が巡る。南・北壁の中央部には壁溝に直交して各々2条の平行な溝が検出された。

カマドは所在せず、また住居跡中央部にも炉跡らしき痕跡も見られなかった。住居跡内の四壁



第3図 1号住居跡出土土器実測図(1/3, 6~8は1/6)

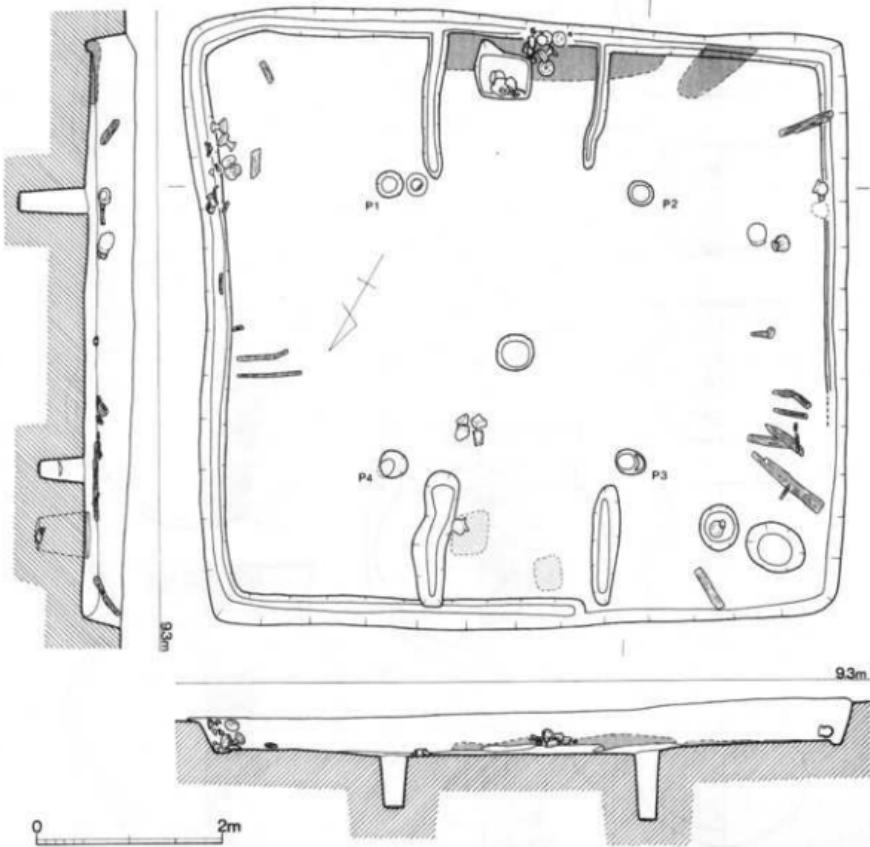
際から炭化材が多数検出され、かなりの灰の堆積が見られる。さらに床面からは完形品に近い土器がまとまって検出され、あたかも火災に遭ったため放置したかの如く受けとれる点から焼失住居と考えられる。

南壁際の中央部には、深さ30cm程の方形土壇があり、土器が検出された。主軸はN-60°-E。出土遺物から年代は5世紀前半と思われる。

出土遺物(第5~7図、図版14~16)

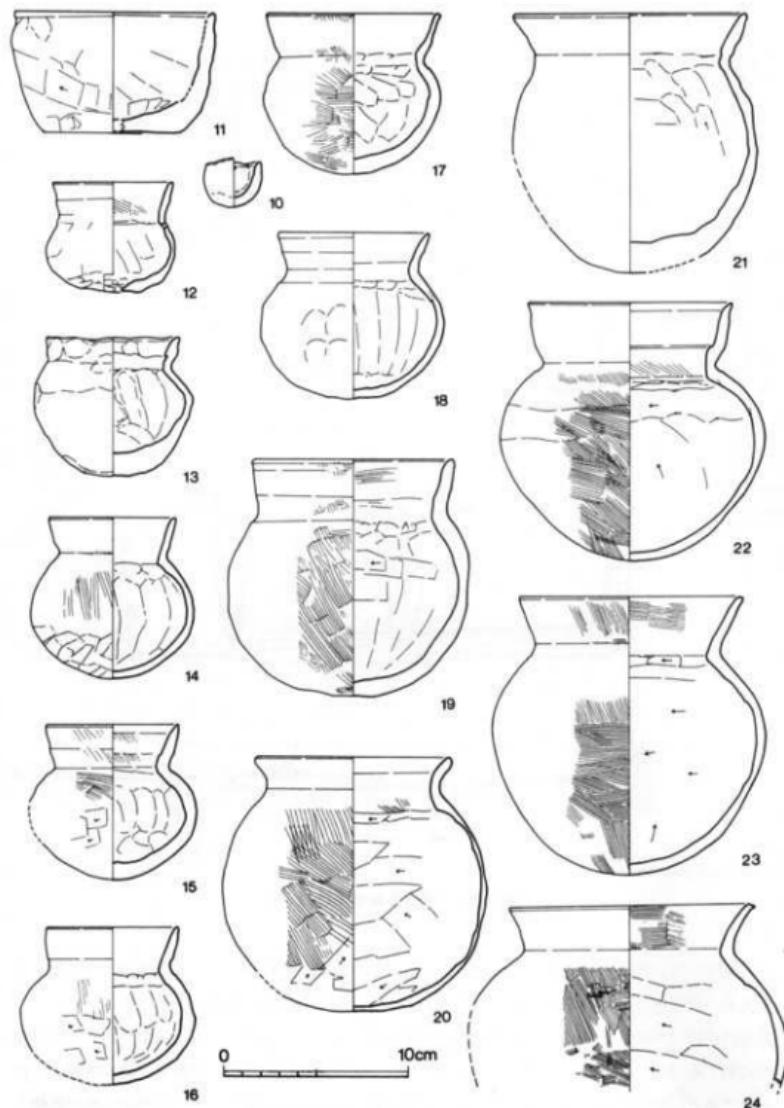
手捏土器 10は碗であり、口径3cm、器高2.8cmを測る。内外面とも指頭ナデ調整である。11は鉢であり、底部は平坦面を有する。体部、口縁部は緩く外反する。器壁が剥落しており調整法は不明瞭である。12, 13は壺を模したものと思われる。

土師器 14~24は小型丸底土器であり、大、中、小の3器種がみられる。14~19は口縁部を外反させ、端部は丸い。20は口縁部中ほどで屈折して端部は外湾気味にひらく。球形の朋部はヘラ削りにより薄手造りとなる。22は頸部下位に屈折面を有して、直立気味の口縁となり、端部を鋭

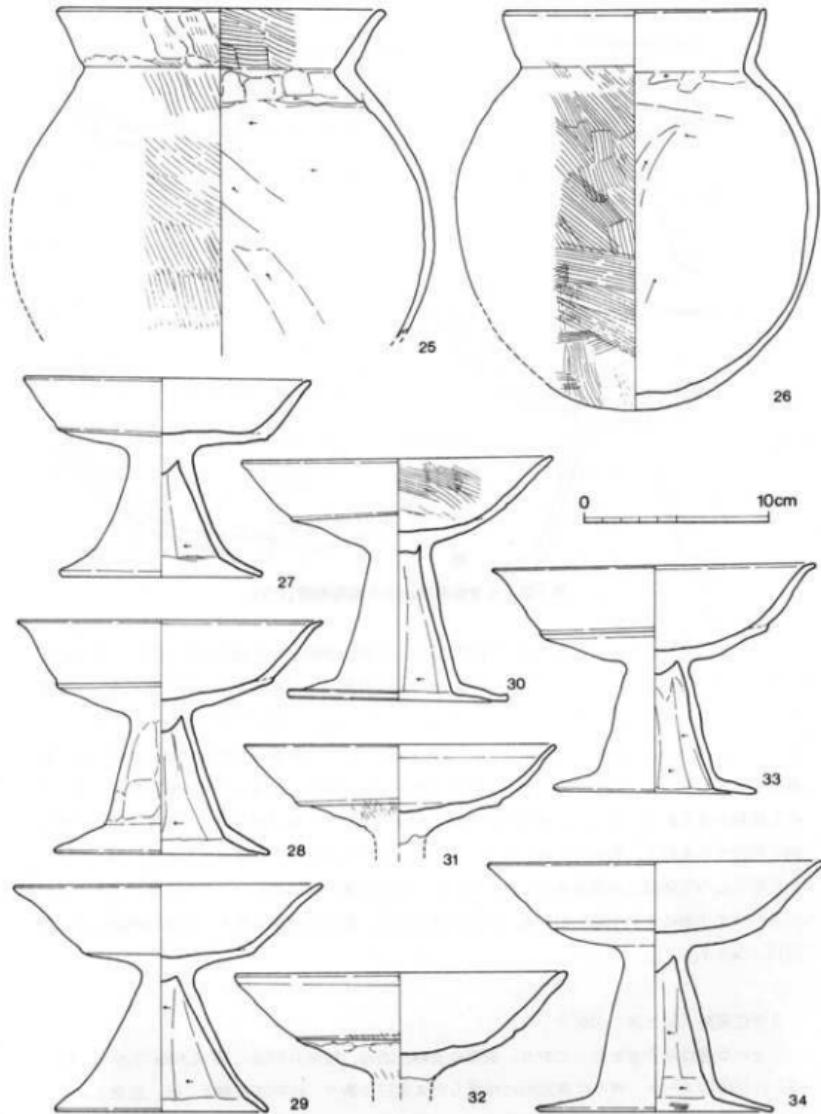


第4図 2号住居跡実測図 (1/60)

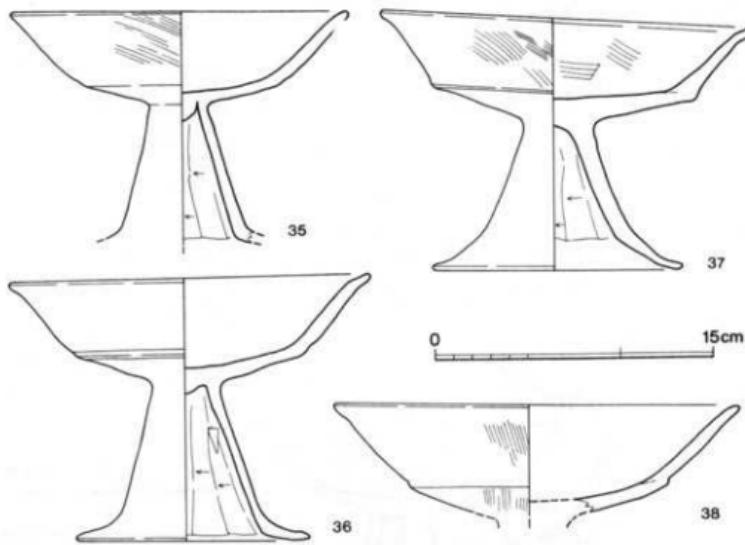
く外反させる。23は口縁部をくの字状に外反させ、内面の基部に縫がつく。口縁部内面は横ハケが入り、胴部内面はヘラ削りする。24はくの字状に外反する口縁の端部は平坦で外傾している。頸部内面は目の細かな横ハケ目が入る。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削り調整である。21は頸部に粘土を貼付して肥厚させている。小型品の14~16と中型品の17~18は胴部内面は指頭ナデ仕上げである。壺は25、26である。25はくの字状に鋭く外反する口縁を有し、端部は平坦で外傾し



第5図 2号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第6図 2号住居跡出土土器実測図(1/3)

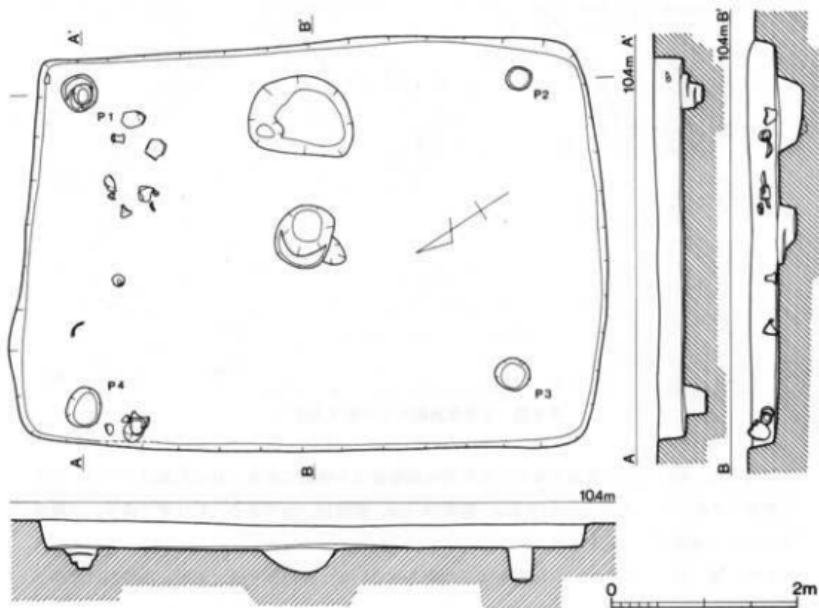


第1図 2号住居跡出土土器実測図(1/3)

ている。頸部外面は指頭ナデ仕上げ、内面は目の荒い斜め方向のハケ目が入る。荒いハケ目が入る胴部外面は2次加熱により赤変している。26は緩く外反する口縁部を有し、端部は丸い。胴部外面は荒いハケ目が入り、内面はヘラ削りをナデて消している。外面は2次加熱のため赤変している。口径14.2cm、器高21.6cmである。27～38は高杯である。杯部の形態は底部と体部の境に屈折面を有するものと、底部から体部への移行は滑らかで、境部に沈線状の段か鈍い綾が入るものとの2種類が見られる。さらに口縁部を短く屈折させる28, 33, 36, 37がある。脚部では、裾部が鋭く屈折するものと、屈折面に綾がつぐがラッパ状にひらくもの2形態が見られる。36, 37はやや大型のもので体部は内湾気味にひらいている。30は杯部内面に荒いハケ目が入る。ほとんどの土器が2次加熱により赤色している。27は口径15.5cm、器高10.8cmであり、37は口径20.1cm、器高14.1cmである。

3号住居跡（第8図、図版2・5）

平面の形態は長方形を呈しており、規模は長軸6.25m、短軸4.45m、壁高30cmである。柱穴は、住居跡のコーナー寄りに規則的に位置した4本柱であり、柱間は長軸4.7m、短軸3.3mをきっちり保っている。柱穴の深さは15～35cm、底径13～25cmである。四壁には壁溝は巡らず、底



第8図 3号住居跡実測図(1/60)

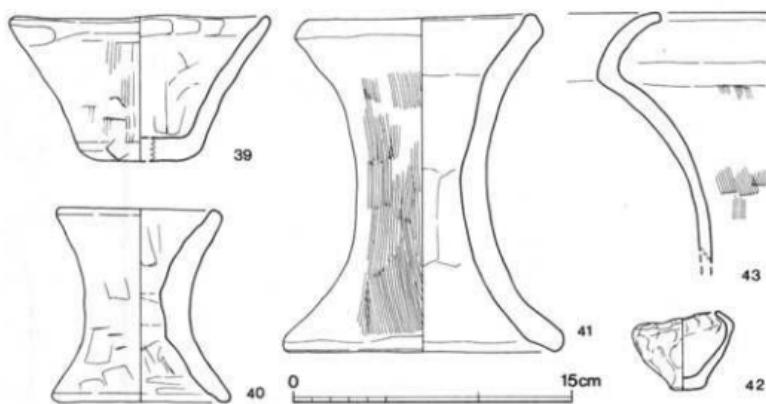
面はほぼ平坦である。

住居跡の中央部には、二段掘りの円形土壇があるが、焼土・灰などは検出されなかつたため炉ではない。主軸はN-33°-Eである。住居跡の東側コーナー壁際からは床面から10cm程浮遊して石庖丁が検出され、同じく東壁側からは土器が出土した。年代は出土遺物から弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物 (第9・48図、図版5・16)

石器 (第49図、図版5) 1は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。長く使用したものと思われ、かなり使い込まれている。円孔は4個あり、後で2個の円孔を足したものと思われる。刃部は表裏から研ぎ出されていて鋭い。全長8.4cm、最大幅3.2cm、重さ20.95gである。

土器 (第9図、図版16) 39は鉢であり、体部中位を凹窓させ、口縁部は外反する。口縁部内外面は横方向に指頭ナデ仕上げしている。体部外面は一部ハケ目が残るがナデ仕上げする。復原口径14.1cm、器高7.8cmである。40・41は大小2種類の器台である。体部中位が最もくびれ、上下部



第9図 3号住居跡出土土器実測図(1/3)

は外向する。40は器表が磨滅気味のため外部の調整法は不明瞭である。41は外面はハケ目、内面は指頭ナデ仕上げである。口径13.5cm、器高18.1cm、底径15.1cmである。43は壺であり、口縁部は外向し、端部は平坦面を有する。

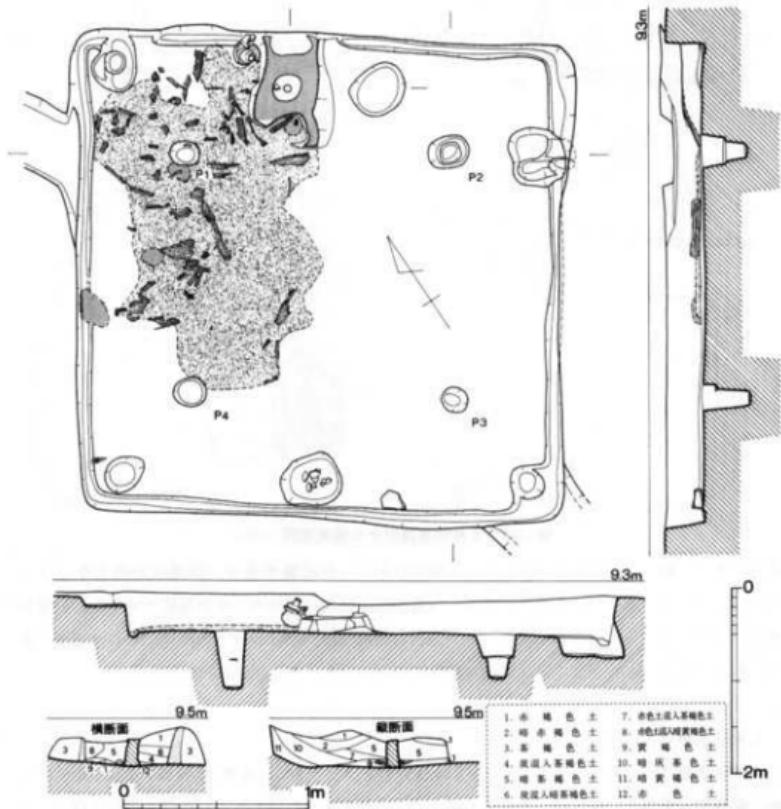
手捏土器 42は碗であり、口縁部を鋭く内傾させている。底部は平底であり、内外面は指頭ナデ調整する。

4号住居跡（第10図、図版5）

平面の形態は方形を呈し、規模は長軸・短軸とも5.25m、壁高40cmである。柱穴は規則的に位置した4本柱であり、柱間は東西軸2.85m、南北軸2.7mである。柱穴の深さは47~62cmと比較的深く掘り込まれており、P 4は更に深く85cmを測る。底径は15~20cmであり、P 2のみ二段掘りである。四壁には底幅5~10cm、深さ5cmの壁溝が巡る。

カマドは北東壁の中央部近くに付設されており煙道は住居跡壁の外方へ突出していない。カマドは焚口部の天井部は崩壊して床に落ちていたが、焚口奥壁と煙道部までの天井は薄く残存していた。焚口中央部には高さ15cmの土製支脚が立っており、床は赤く焼き固っている。カマド断面で見た燃焼部幅は45cmである。煙道部は床面から天井までの高さ14cmを測り、煙道径25cmである。

住居跡の西側半分近くの範囲には特に集中的に炭化材が検出され、焼土や灰も出土しており2号住居同様、火災に遭ったものと思われる。カマドの左脇の壁際には土師器壺が据えられており、口縁部には長頸壺が1個のせられていた。主軸はN-33°-Eである。年代は出土遺物から5



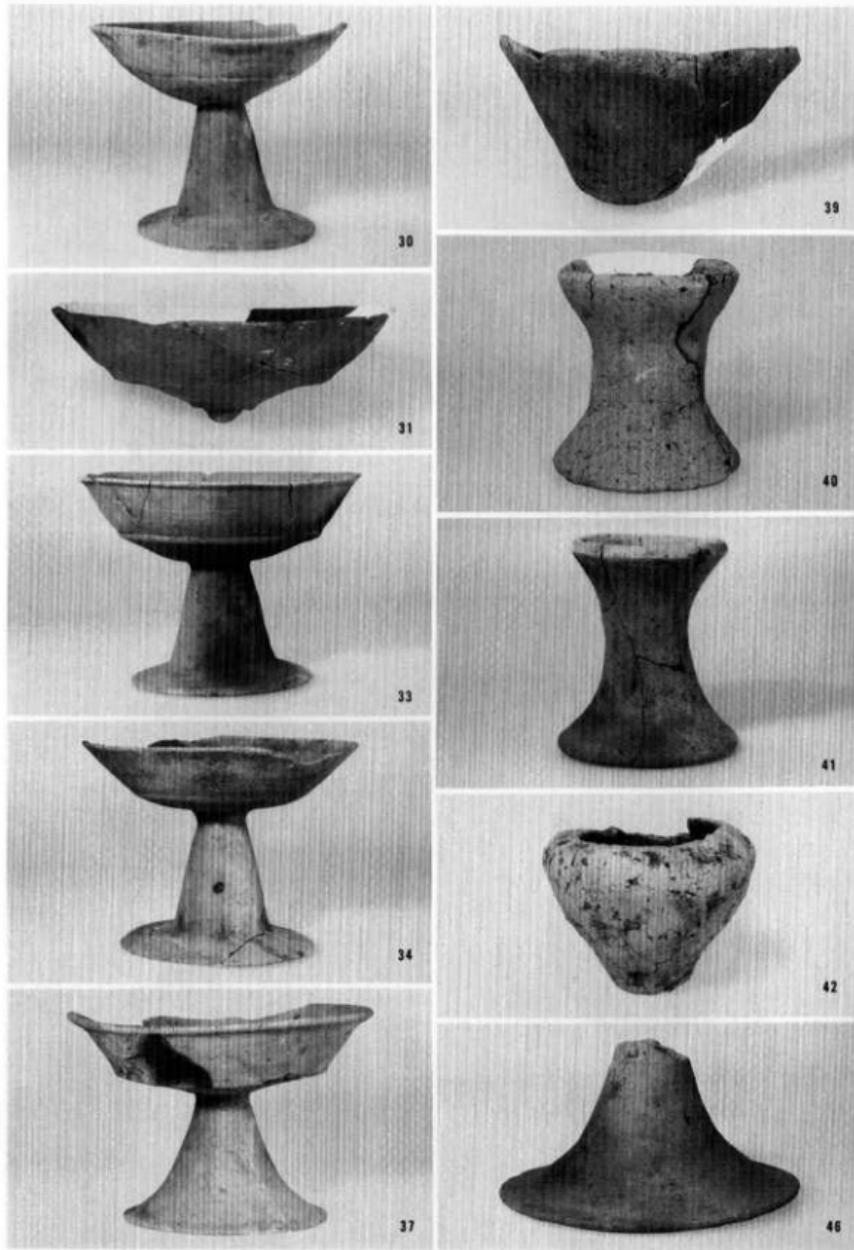
第10図 4号住居跡実測図(1/60)

世紀中頃と思われる。

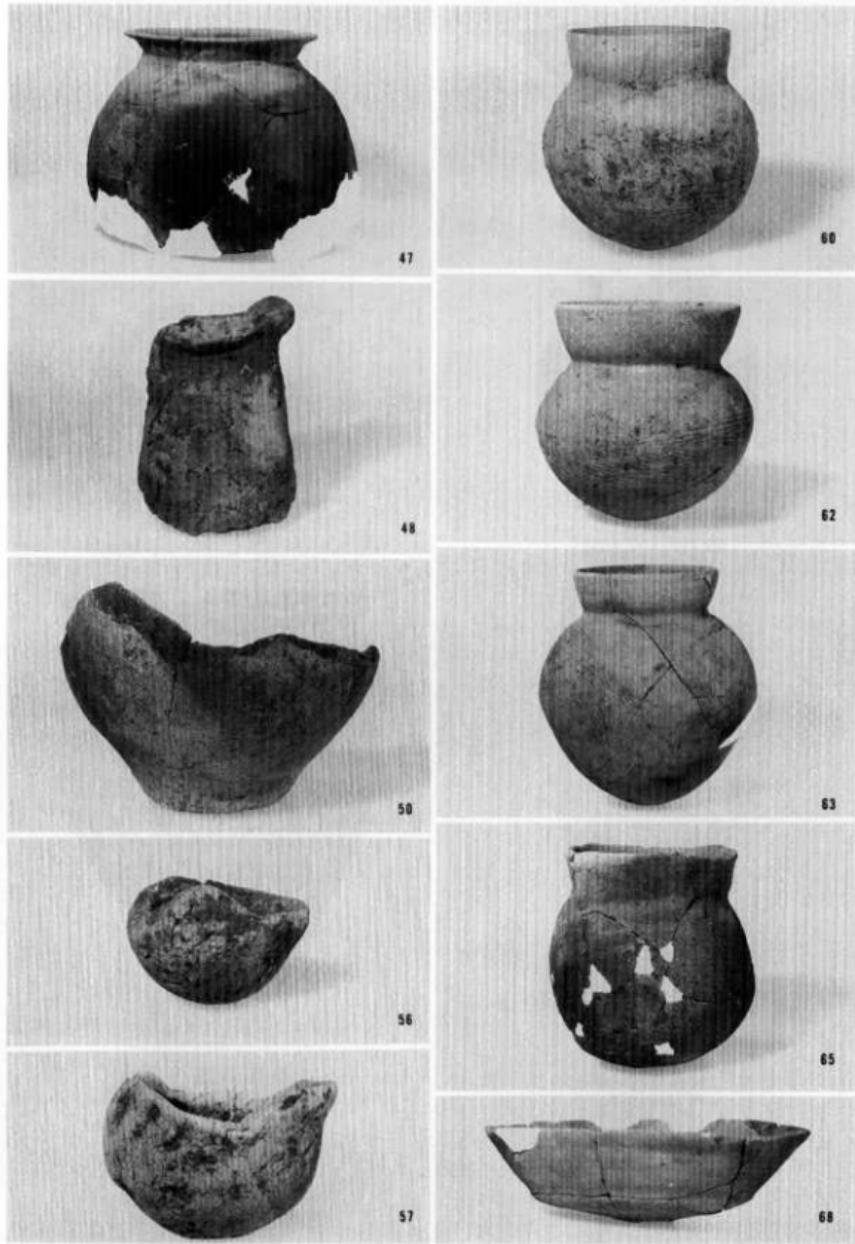
出土遺物 (第11図、図版17)

須恵器 44は杯身である。立ち上がりは1.7cmと長く、緩く内傾する。口縁端部は凹曲する。底部外面は回転ヘラ削りし、わずかに丸味をもつ。復原口径11.3cm、蓋受け部径13.0cm、器高4.7cm。陶邑I型式3段階の土器であろう。

土師器 (45~48) 45は椀であり、口縁部を直立させる。底部外面はヘラ削りする。46は高杯の



住居跡出土土器





67



76



71



80



72



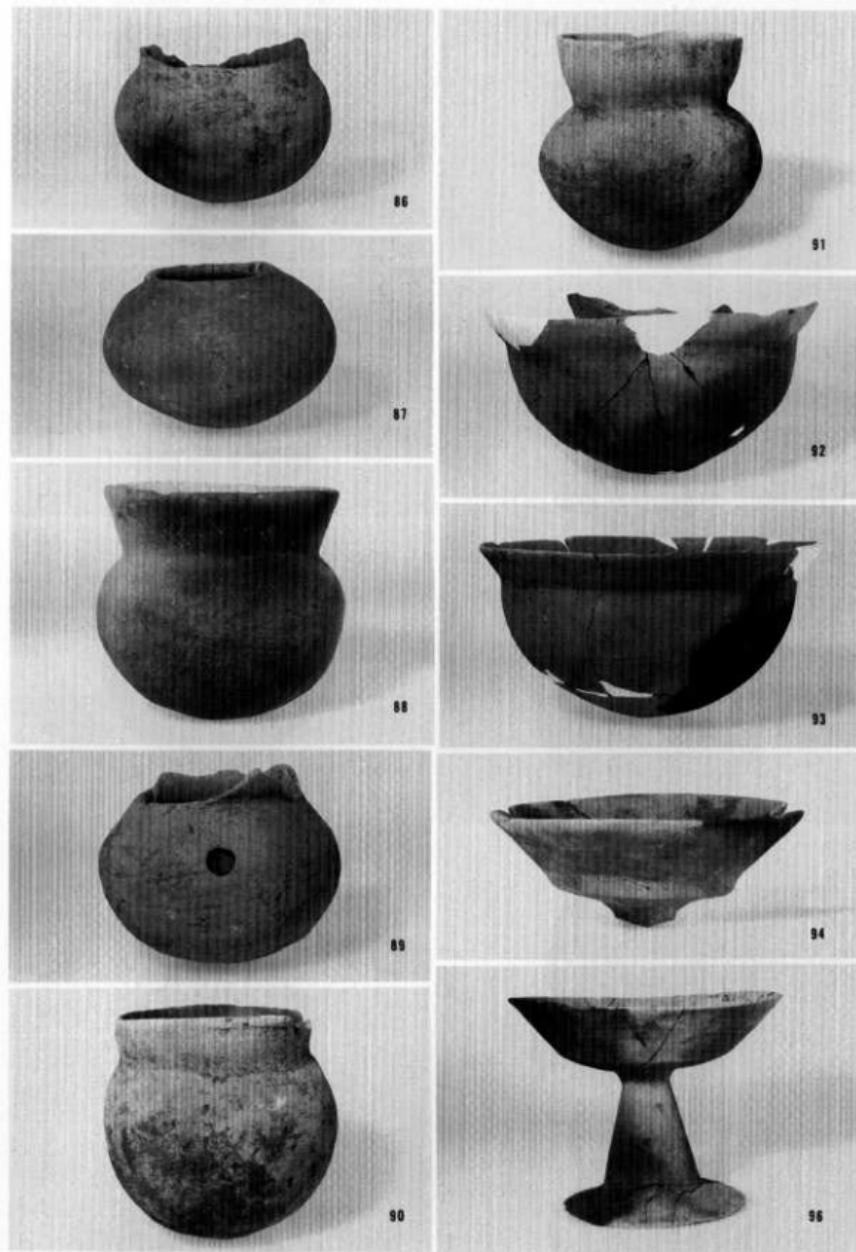
81



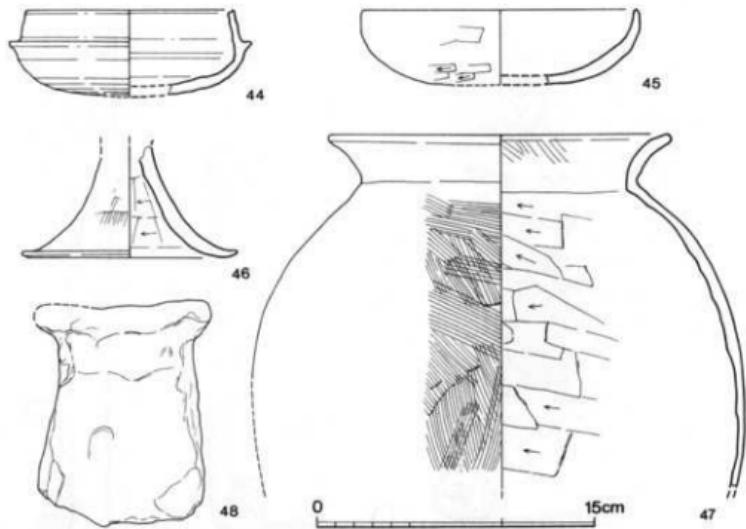
74



85



住居跡出土土器



第11図 4号住居跡出土土器実測図(1/3)

脚部であり、裾部は屈折を有さずにラッパ状にひらく。47は甌であり、頸部は外肩気味にひらき、口縁部でさらに外反する形態である。口縁部内面は粗い斜めのハケ目後横ナデする。胴部外面はハケ目、内面は横方向のヘラ削りである。口径18.5cm。48はカマド内に立てられた支脚であり、断面は隅丸方形を呈する。上端部は庇状に突出させている。胎土にはスサが入る。

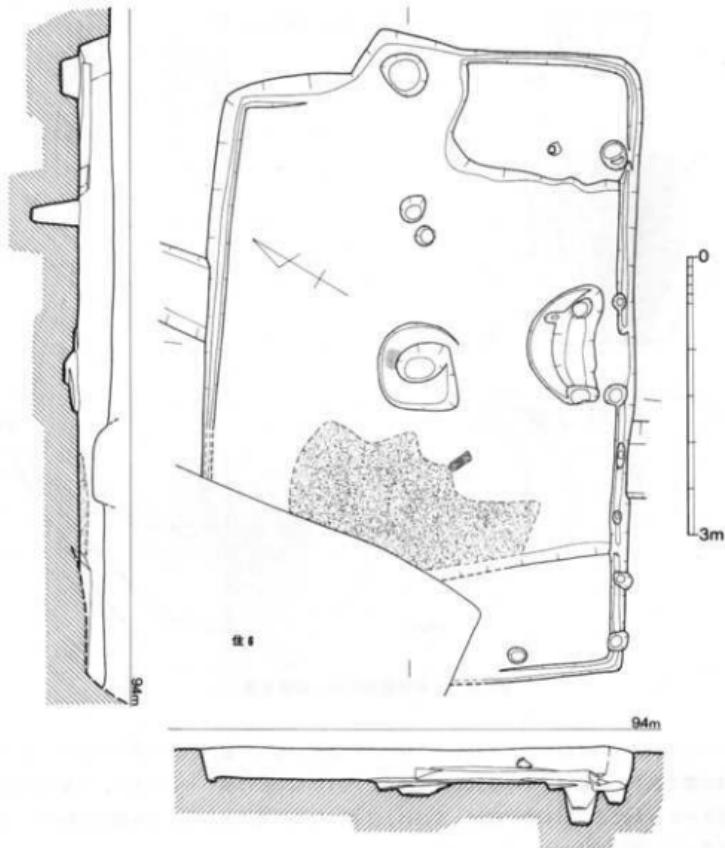
5号住居跡（第12図、図版6）

6号住居跡に切られている。平面の形態は長方形を呈しており、規模は、長軸6.85m、短軸4.65m、壁高35mを測る。柱穴は、長軸中心線上の2本柱であると思われるが西側のそれは確認できなかった。

住居跡中央部には80cm×90cmで円形状の浅い土壇があり、焼土が検出され、床面は焼けて赤色硬化しており炉跡と思われる。

住居跡の南東と南西コーナ部には床面より、10cm程高く造り出したベット状遺構がある。完掘できた南東のベット状遺構は長さ1.9m、幅1.2mを測る長方形を呈するものである。

四壁には溝底幅3～5cm、深さ3～5cmの壁溝が巡る。南壁の中央部近くには1.3m×0.7m、深さ30cm程の梢円形土壇があり、梢円形長軸両端部の底面には各々1個の柱穴があるが、この柱穴は8・9号住居跡でも見られる如く、垂直壁でなくいづれも内傾して掘られている。主軸はN



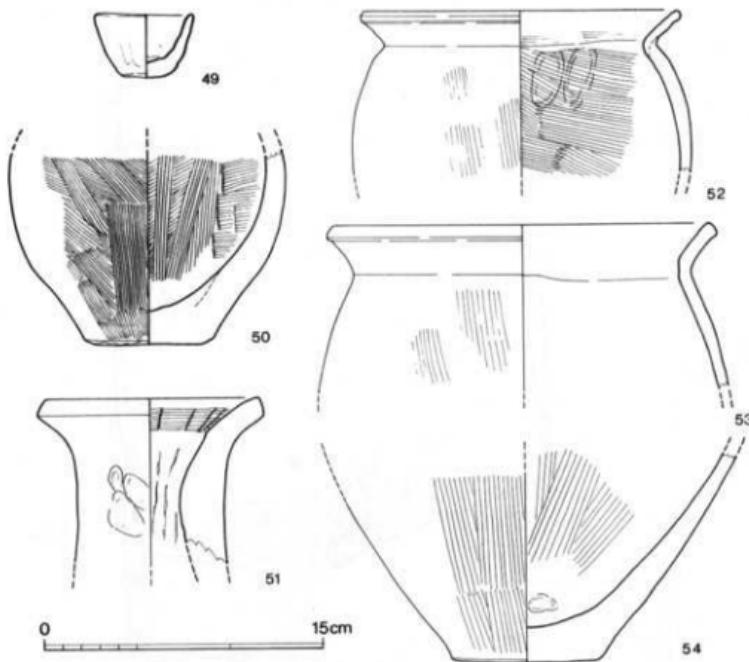
第12図 5号住居跡実測図 (1/60)

-63'-Eである。年代は出土遺物から弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物 (第13図、図版17)

手捏土器 49は鉢であり、体部は外反する。内外面とも指頭ナデ調整であるが、指頭圧痕がわずかに残る程度の丁寧なナデである。胎土に粗砂を多く含む。口径5.3cm、器高3.4cm。

土器 50は器壁の厚い土器であり、底部はほぼ平坦である。内外面ともにハケ目が入り、内面

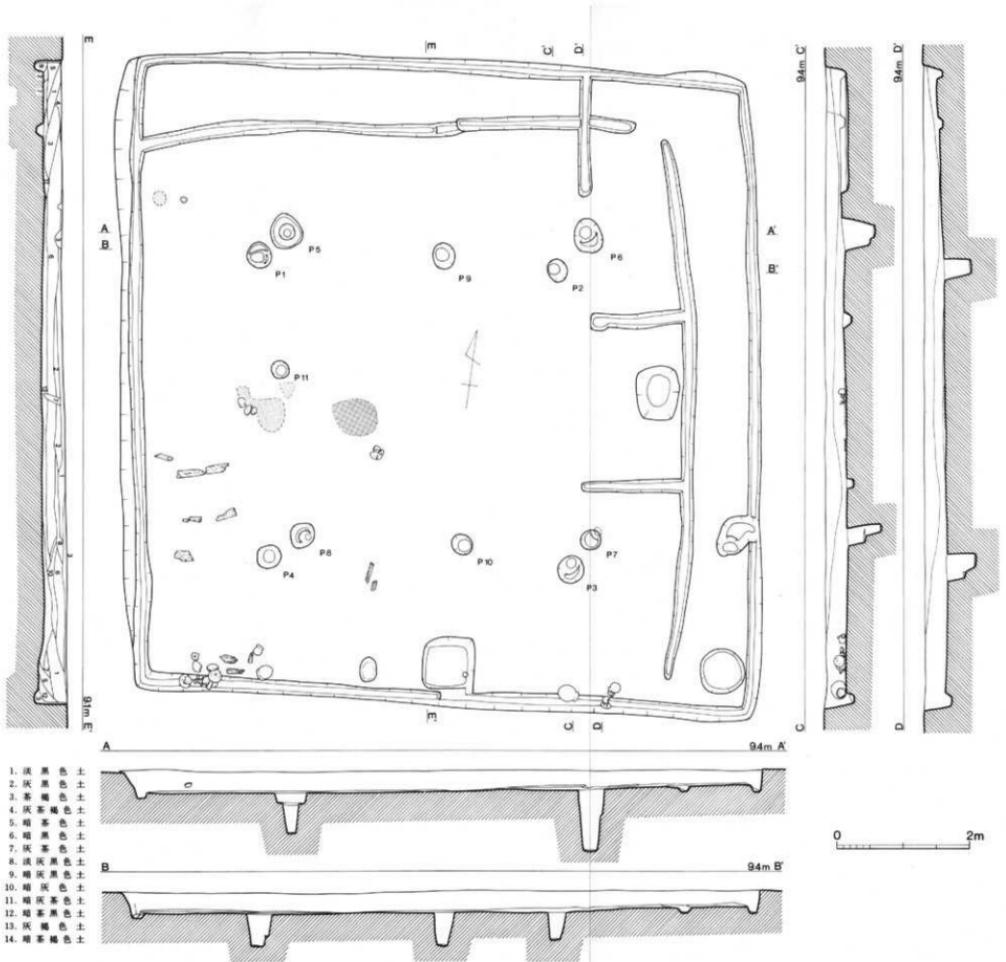


第13図 5号住居跡出土土器実測図(1/3)

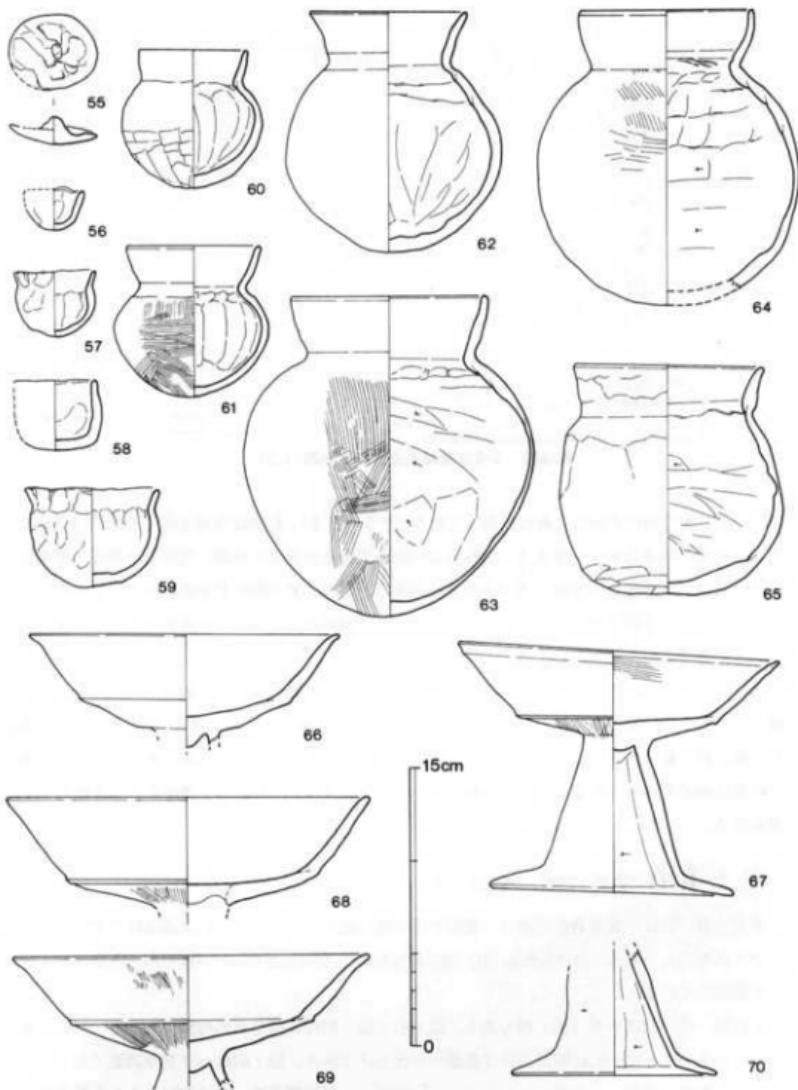
のハケ目は粗い。51は器台であり外面は丁寧にナデ調整する。口縁部内面は横ハケ目が入る。52・53は甕であり、口縁部はくの字状に外反する。52は胴部内面は横ハケ目が入り、口縁部内面にも若干ハケ目が残る。54は壺の底部と思われ、底部は僅かに丸味をもつ。内外面とも粗いハケ目が入る。

6号住居跡（第14図、図版7）

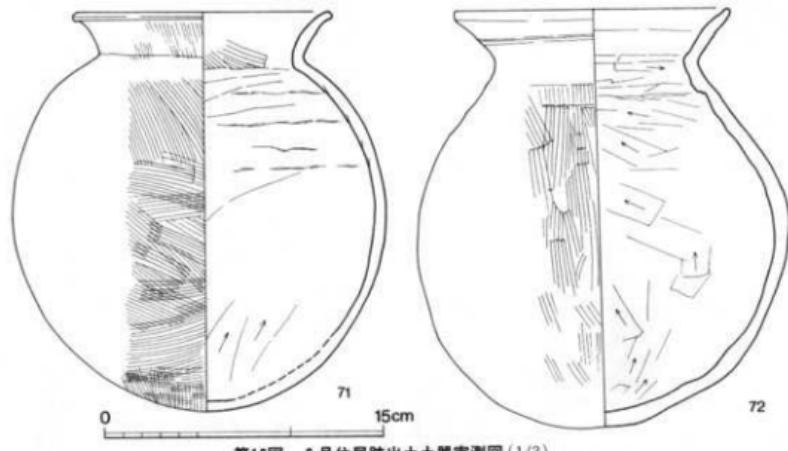
5号住居跡を切っており、本遺跡出土住居跡のうち最大規模のものである。平面の形態は方形を呈しており、規模は、南北軸9.75m、東西軸9.7m、壁高35cmである。当該住居は建て直して北・東側に1m程拡張しており最初の規模は内側の壁溝から確認することができる。当初の住居跡は、南北軸8.9m、東西軸8.7mであり、柱穴は規則的な4本柱である。柱間は4.5~4.6mであり、柱穴は略正方形のコーナー部分に正確に位置している。柱穴は住居跡拡幅の際に最初のもの



第14図 8号住居跡実測図 (1/60)



第15図 6号住居跡出土土器実測図(1/3)



第16図 6号住居跡出土土器実測図(1/3)

よりは北、東方向にずらして新たに造っており(P5～P8)、柱間は当初と同じく4.5～4.6mである。柱穴の深さはP1～P8はいづれも42～60cmであるがP6のみ深くて90cmを測る。壁溝は4壁に巡り、底面幅5～8cm、深さ3～8cmである。P5～P6間にP9が、P7～P8間にP10が、P5～P8間にP11があり、主柱穴を支える予備の柱となるものかも知れないがP6～P7間には検出されなかった。

カマドは付設されておらず、住居跡中央のやや西寄りには65cm×55cmの範囲に焼土が見られがれ跡と思われるが、掘り込みはない。南壁中央には方形の土壤があるが、埋土は普通のものであり、他と何ら変わった所はなかった。この南壁際には2カ所から集中して土器が検出された。一部には炭化材が見られるが量は少い。主軸はN-8°-Wである。年代は出土遺物から5世紀前半と思われる。

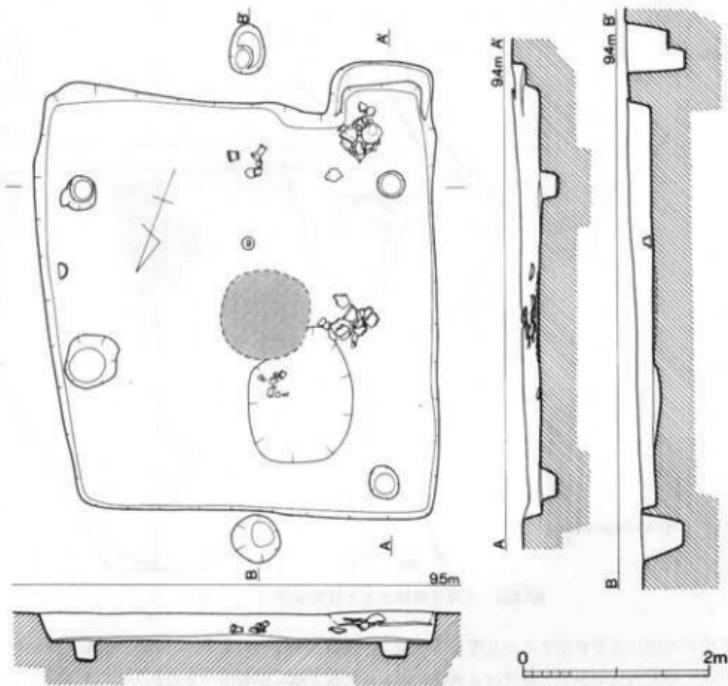
出土遺物 (第15・16図、図版17・18)

手捏土器 55は土製模造鏡であり、裏面や中央部に鉢がつくが孔はない。表面は平坦でなく凸レンズ状を呈している。口径4.8cm。56～59は鉢を模したものである。いづれも内・外面とも指頭ナデ調整している。

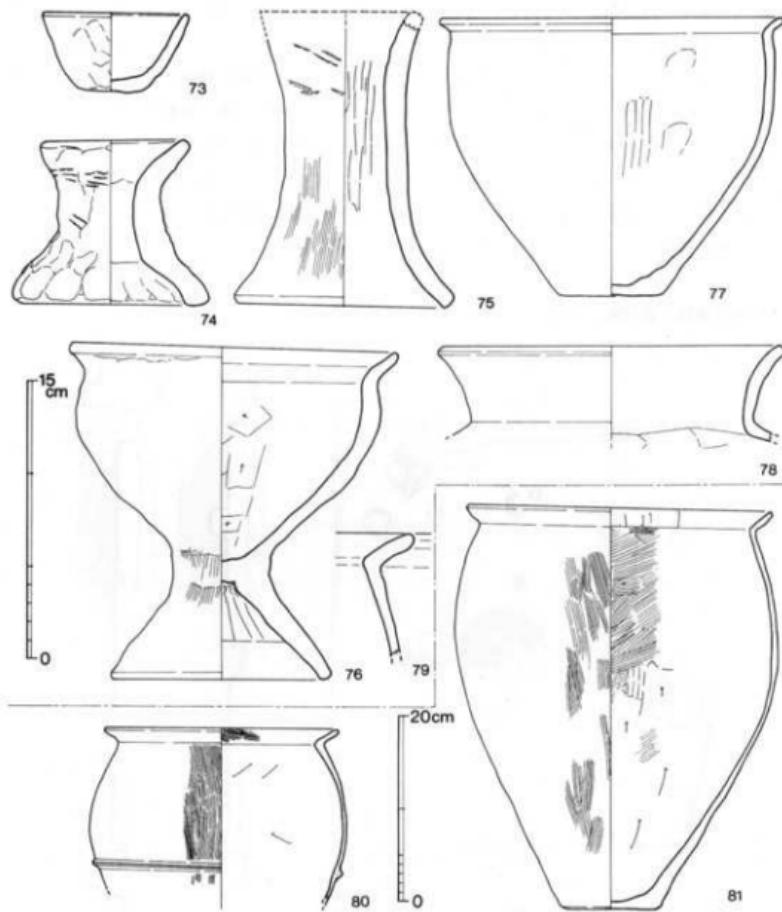
土師器 60～64は小型丸底土器である。60・61・63・64は口縁部は内舟気味となる。62は口縁部を外反させる。60～62は胴部内面は指頭ナデ仕上げであり、63・64はヘラ削り調整である。60は外面の胴部下半部にヘラ削りしており、61・63はハケ目調整する。60は壺71の中から検出され

たものである。65は底部がやや平坦な小型の甕である。口縁部に粘土を貼付して肥厚させ、緩く外反するものである。外面の底部はヘラ削りを残し、体部はナデ仕上げしている。66～70は高杯である。杯部は口径に比して器高が低いもので、底部と体部の境は鈍く綻がつく。67～69は杯部底外面に縦ハケ目が入る。脚柱部はラッパ状にひらくもので、裾部を鋭く屈折させる。いづれも2次火熱を受けて赤変している。71・72は壺である。71は口縁部はくの字状を呈して外反し、端部はやや平坦である。球形の胴部外目は粗いハケ目があり、内面はヘラ削り上をナデしている。粘土の接合痕が見られる。72は口縁部は外反し、端部は丸い。胴部外面は粗いハケ目、内面はヘラ削り調整である。

7号住居跡（第17図、図版6）

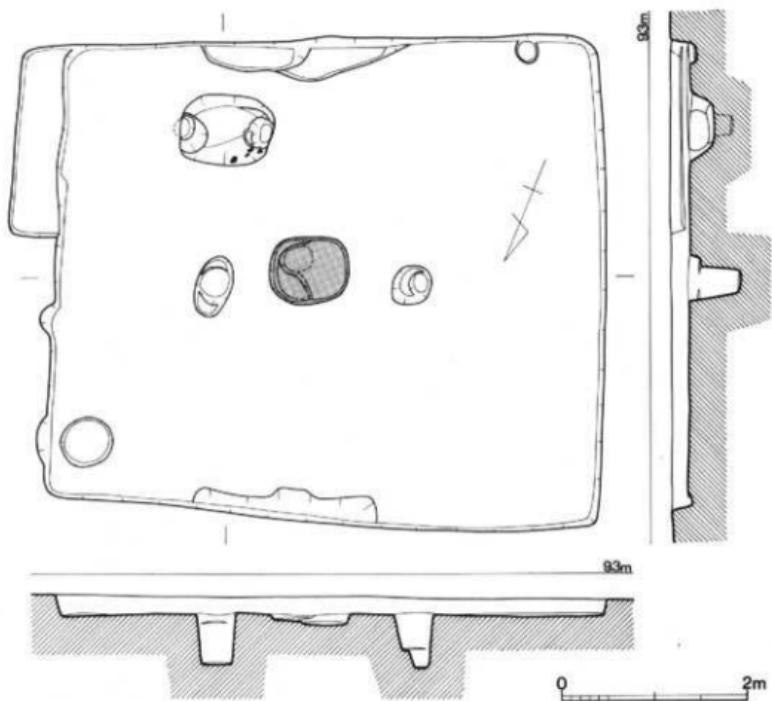


第17図 7号住居跡実測図(1/60)

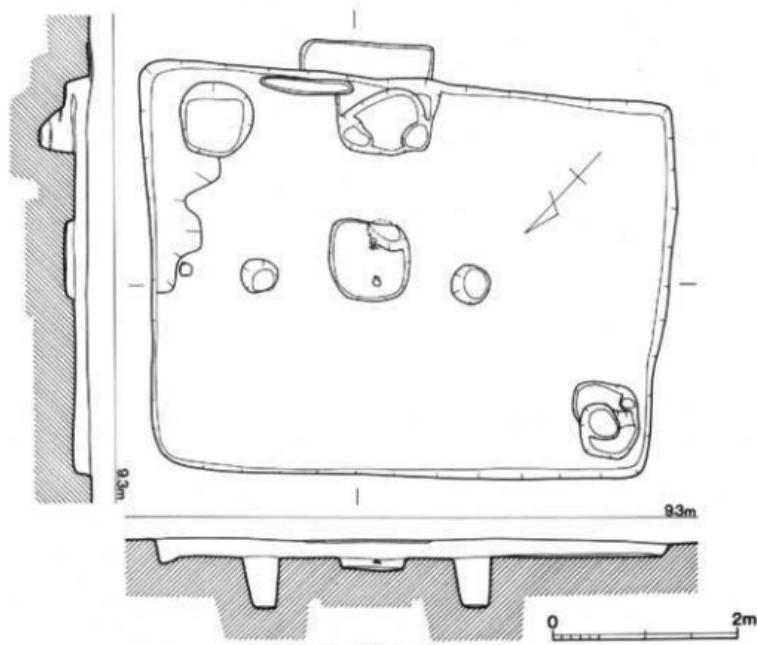


第18図 7号住居跡出土土器実測図(1/3, 1/6)

平面の形態は方形を呈するが北壁が若干短い。規模は長軸(南北壁)4.4m、短軸(東西壁)4.25m、壁高25cmである。柱穴は4本柱と思われるが3個しか検出できなかった。柱間は3.25~3.3mであり、深さは20cmと浅い。南西コーナ部分には幅1.1m、長さ55cm程の方形の突出が見られ、床面は1段を有しており入口に相当するものかも知れない。住居跡の外部、南北壁の中央部



第19図 8号住跡実測図 (1/60)



第20図 8号住跡実測図 (1/60)

付近には各々1個のピットがあるが、当該住居跡と関係があるか否は不明である。住居跡中央付近には、直径0.95mの円形状に焼土が堆積しているのが見られ炉跡と思われるが、掘り込みを有さない。東壁際からは石庖丁の未製品が出土したが周囲に石くずは全くなく、当該住居跡内で加工したものとは思えない。主軸はN-20°-Wである。年代は出土した土器から弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物（第18・48図、図版18）

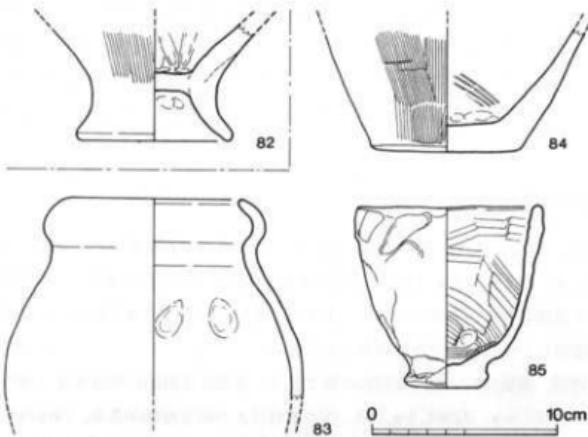
石器（第48図） 3は石庖丁の未製品と思われる。側面には剥離調整し、表裏面は自然面を残す。全長14.7cm、最大幅7.3cm、厚さ1.05cmである。材質は雲母片岩である。10は石皿であり、表裏面ともよく研磨され、側面部分が厚く、中央部は薄い。全長23.5cm、幅15.1cm、中央部厚0.9cm、左右端部厚1.1~2.1cm。材質は雲母片岩である。

土器（第18図、図版18） 73は手捏ねの鉢であり、体部は直線的に外反する。内外面ともナデ調整である。口径7.8cm、器高4.3cm。74、75の器台は大小の2種類がある。74は内外面ともナデ調整である。75は外面に縦ハケ目が入るが大半は磨滅している。内面は工具により縦方向にナデしている。77は鉢であり、口縁部は短く、くの字状に外反する。内外面ともナデ調整であり、内面は粗いハケ目が一部残る。76は脚付鉢であり、口縁部は大きく外反し、端部は丸い。脚部はハの字状にひらいた厚手のものである。外面はナデ調整であり、一部にハケ目が残る。内面はヘラ削りする。口径17.5cm、器高18cm、底径11.9cmである。2次火熱により媒が付着する。78は壺であり、口縁部は外湾気味にひらき、端部は平坦である。79~81は甕であり、いづれもくの字状に鋭く外反する。80は胴部に1条の三角凸帯がつく。胴部外面は目の細かいハケ目調整する。81は胴部中央よりやや上位が膨んでいる。胴部外面はハケ目、内面上位はハケ目、下位はヘラ削りする。81は口径33.1cm、器高43.5cmである。

8号住居跡（第19図、図版2）

平面の形態は長方形を呈しているが、東壁が若干短い。規模は長軸（東西壁）5.9m、短軸（南北壁）5.25m、壁高20cmである。柱穴は長軸の中央線上の2本柱であり、柱間は2.25m、深さ55cm、60cmを測る。柱穴間の中央部には長さ70cm×85cmで隅丸方形の浅い土壙があり、焼土が若干検出されたが炉跡とは考えにくい。南壁から55cm程内側には隅丸方形の土壙があり、長軸の左右端部にピットが各1個検出された。ピットの断面は垂直でなく内傾している。土壙内からは炭と焼土が出土し、底面は硬い。土壙の東壁は厚さ1cm程焼けて硬くなっている、炉跡かと思われる。主軸はN-68°-Eである。年代は出土遺物から弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物（第21図82）



第21図 8・9号住居跡出土土器実測図(1/3)

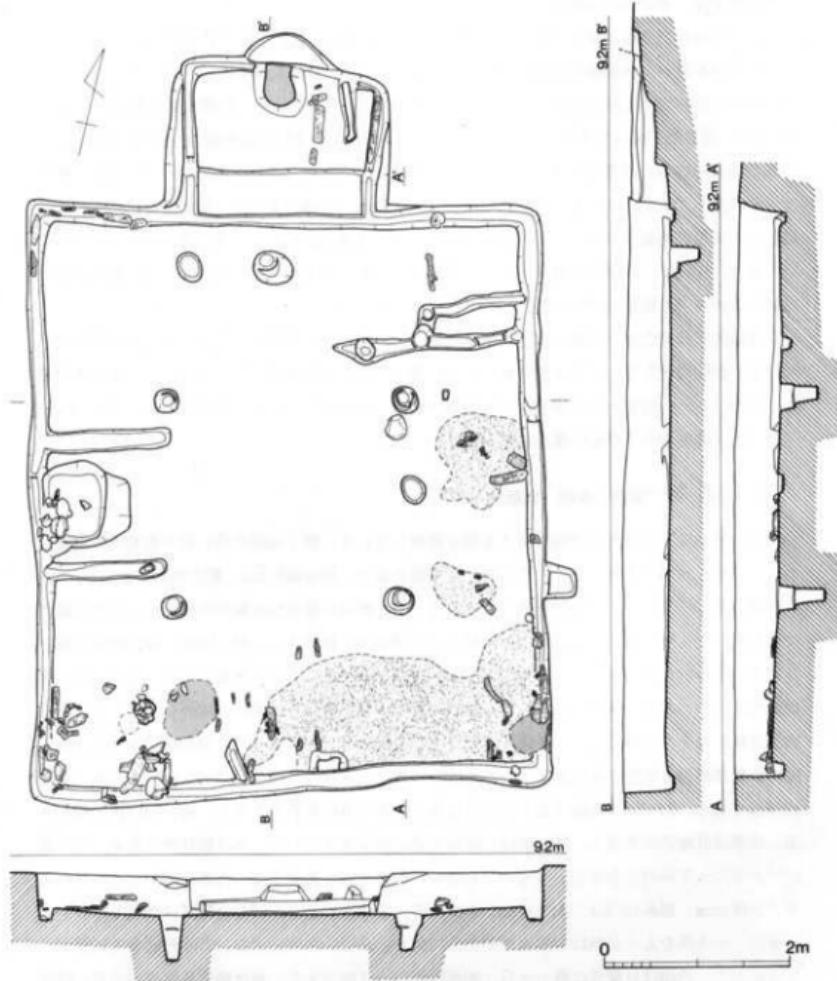
土器 82は台状部分の小片である。底部外面は擦過に近い縦ハケ目が入り、内面は指頭ナデ調整する。

9号住居跡（第20図、図版2）

8号住居跡の南に隣接しているが切り合ってはいない。平面の形態は長方形を呈しており、西壁が若干短い。規模は長軸（東西壁）5.55m、短軸（南北壁）4.25m、壁高18cmを測る。柱穴は長軸の中央線上の2本柱であり、柱間は2.25m、深さ55cmである。住居跡の中央部には、長さ85cm×85cmで隅丸方形の浅い土壤があるが焼土等は検出されなかった。四壁には壁溝は巡らず、平坦な床面は踏みしめられていて硬くしまっている。8号住居跡と同様に南壁際には長方形の土壤があり、両端部には各1個のピットが所在し、壁断面は内傾している。8号住居跡と異なる点は中から焼土、炭が出なかった点である。主軸はN-47°-Eである。年代は出土遺物から弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物（第21図83～85、図版18）

土器 83は袋状口縁壺であり、器表が剝落しているため調整法は不明瞭である。84は底部はわずかに丸味をもつ凸レンズ状となる。外面はやや細かいハケ目が入り、内面は粗雑な横方向ナデ調整である。85は碗であり、体部は緩く外反しており、口縁部は器壁が厚く、端部は丸い。台状の底部がつく。内面は粗いハケ目が入り、外面はナデ調整する。口径10cm、器高9.7cmである。



第22図 10号住居跡実測図 (1/60)

10号住居跡（第22図、図版8）

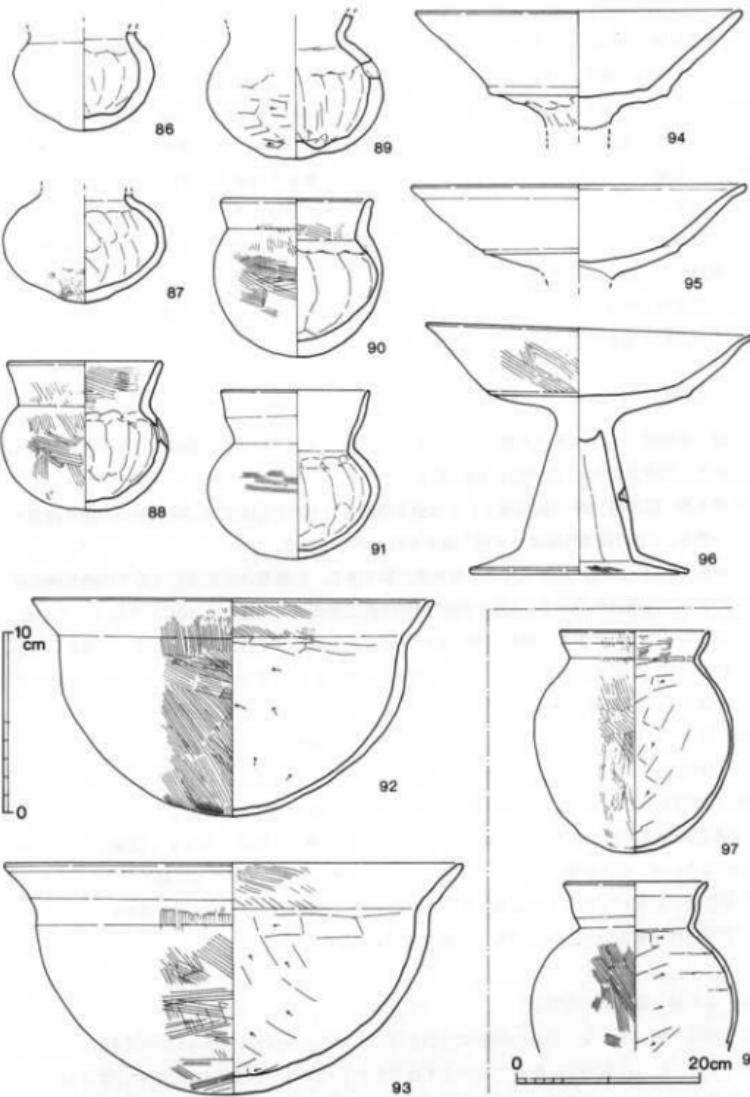
平面の形態は長方形を呈しており、北壁には奥行き1.7m、幅2.4mの突出部が付設されている。突出部を除いた住居跡の規模は長軸（南北壁）6.45m、短軸（東西壁）5.6m、壁高50cmを測る。柱穴は規則的な4本柱であり、住居跡の中央部分に位置している。柱間は東西軸2.5m、南北軸2.2m、深さ35~50cmであり、いづれも途中に段がつく。四壁には底面幅6~10cm、深さ6~13cmの壁溝が巡る。西壁中央部にはこれと直交する長さ1.2~1.5mの2条の溝が、1.2mの間隔で平行に走っている。この溝で囲まれた壁部分には70cm×90cmの長方形土壙があり、中から土器と共に土製模造鏡が出土しており祭祀に関係がある遺構と思われる。突出部分は床面に段がついており、床面レベルは住居跡レベルよりも高い。北壁の中央部には、55cm×52cmの範囲に焼土があり、カドの痕跡と思われる。

住居跡内には炭化材と多量の焼土、灰が堆積しており、特に東南部コーナー付近は住居跡壁が焼けて一部硬質化しているのが見られ、火災に遭ったものと思われる。また、住居跡の西壁際と、南西コーナー付近からは床面レベルで集中的に土器が出土した。主軸はN-14°-Wである。年代は出土遺物から5世紀中頃と思われる。

出土遺物（第23~48図、図版19~20）

石器（第48図）4は仕上げ砥であり5面を使用している。幅1cm幅の浅い段や線刻状の削痕がある。一部は火熱を受けて黒化している。頁岩製であり、現存長8.4cm、最大幅4.3cm。

土器（第23図）86~91は小型丸底土器である。88、90の口縁部は直線的に外反し、91は口縁部中位に膨みをもつ。胴部内面はいづれも縱方向に指頭ナデ調整する。88、90は口縁部内面は横ハケ目が入る。胴部外面はハケ目調整し、89はヘラ削りのままであり、胴部に円孔を穿つ。92、93は鉢であり、口縁部は直線的に外反し、端部はやや尖る。92は口縁部内面はハケ目が入り、胴部内面は縦がほとんど残らないヘラ削り調整する。外面はハケ目が入る。口径22cm、器高11.9cm。93は口縁部内面と体部外面に粗いハケ目が入り、体部内面はヘラ削りする。口径25.1cm、器高12.8cmである。94~96は高杯であり、94は底部と体部の境に屈折面を有し、95、96は純く縫が入る。体部は直線的に外反し、95、96は口縁部を更に外反させている。96は脚柱部に貫通しない孔が一ヵ所に入るが対になるというものでもない。裾部を鋭く屈折させ、内面に細かいハケ目が入る。口径18cm、器高13.6cm、底径12cmである。97、98は壺であり、97の口縁部は外反しており、外面はやや丸味をもつ。98は口縁部や上位に純く縫がついて外反する。97は外面全てに粗いハケ目が入り、内面は口縁部は横ハケ目、胴部は粗いヘラ削りする。98は胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りする。



第23図 10号住居跡出土土器実測図 (1/3, 1/6)

11号住居跡（第24図、図版9）

大形の住居跡であり、6号大形住居跡の南2.2mに位置し6号周溝を切っている。平面の形態は長方形を呈しており、規模は長軸（南北壁）9.3m、短軸（東西壁）8.1m、壁高50cmを測る。柱穴は規則的に配置した4本柱であり、柱間は長軸4.6m、短軸3.7m、深さ45～68cmである。四壁には底面幅5～7cm、深さ4～8cm程の壁溝が巡る。東壁と西壁中央部にはこれと直交して平行に走る溝があり、東壁のそれは一部は途切れているが長方形に囲んでいる。西壁中央部には梢円形土壙があり土器が詰っている。遺物は生活空間である、中央部分からは出土せず、南壁、東壁の壁際からほぼ完形で10数点検出された。

カマドは所在せず、また炉跡と思われる様な土壙も検出しなかった。主軸はN-20°-Wである。年代は出土遺物から5世紀前半と思われる。

出土遺物（第25・26・48図、図版20・21）

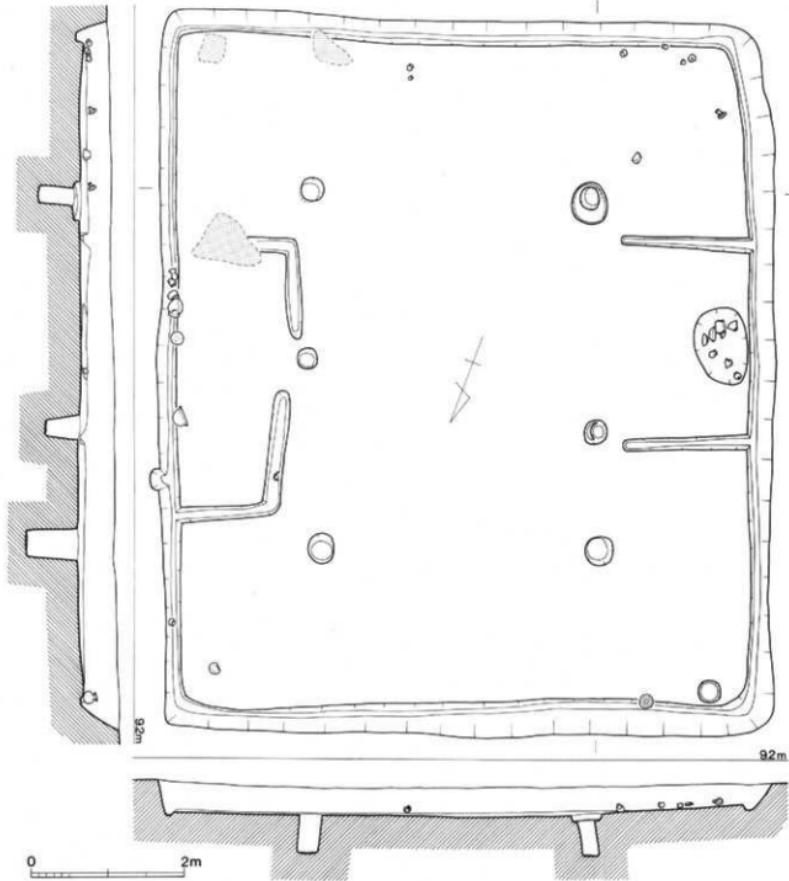
石器（第48図）5は凝灰岩製の荒砥である。3面を使用しており、砥面には線刻状の削痕が見られる。現存長6.3cm、最大幅4.3cmである。

手捏土器（第25図）99～101は壺もしくは甕を模造したものと思われる。99、100は内面に指頭ナデ痕が残る。101の底部外面はヘラ削り後ナデ仕上げしている。

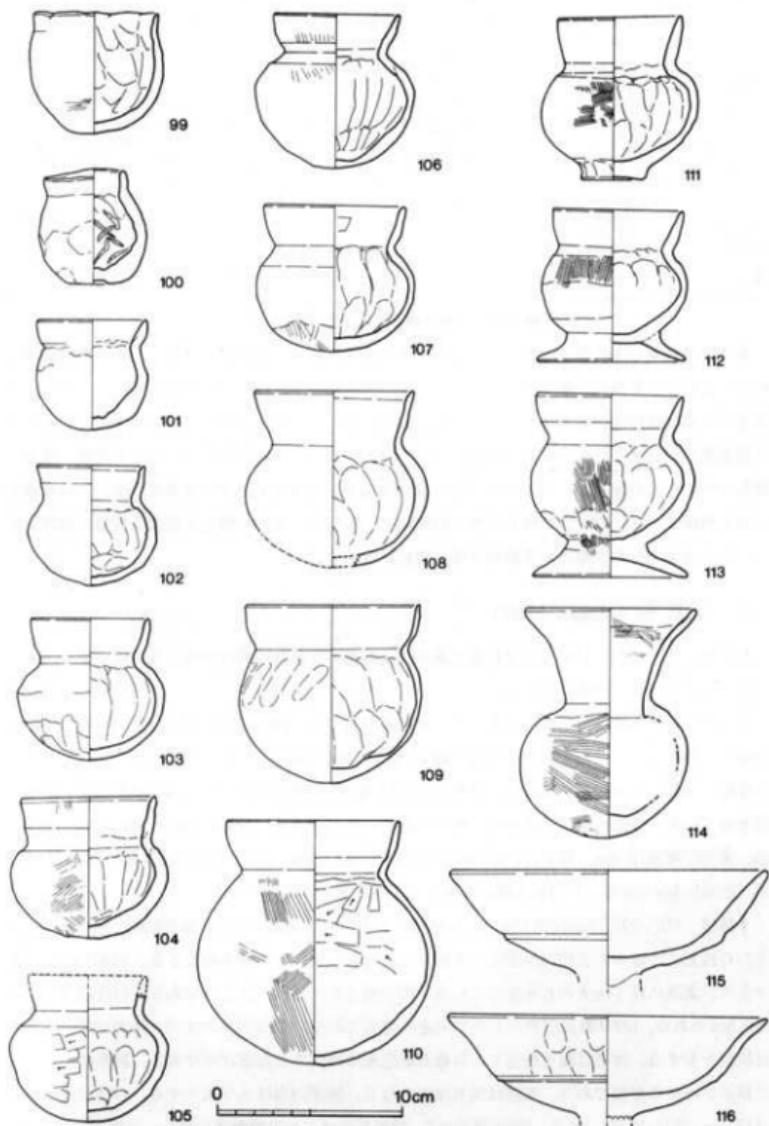
土師器（第25・26図）102～110は小型丸底土器である。口縁部は中央部分で若干内湾気味に外反しており、端部はやや尖る。102～109は胴部内面は指頭ナデ調整し、110はヘラ削りしている。外面は103、105はヘラ削り、104、106、107、110は部分的にハケ目が残り、他はナデ調整している。111～113は小型丸底土器に台、もしくは脚をつけたものである。胴部内面は指頭ナデ調整し、外面はナデと部分的にハケ目調整している。114は大きく外反する長頸を有した壺である。口縁部内面は一部横ハケ目が見られる。胴部外面はハケ目調整し、底部はさらにナデ仕上げしている。口径9.3cm、器高12.4cmである。115～117は高杯であり、体部と底部の境は僅かに段がつく。116は口縁部を外反させており、体部外面に指頭ナデの痕跡を残す。いづれも口径17.2cmを測る。117の脚部は裾部で鋭く屈折しており、端部は尖る。脚部外面は板状工具による擦過の後ナデ仕上げしている。内面は横方向にヘラ削りする。118は甕であり、くの字状口縁を呈し、中央部は僅かに膨む。端部は平坦面をなし鋭く棱がつく。器表は磨滅しているが細かい斜めのハケ目が残る。胴部内面は横方向にシャープなヘラ削り痕が入る。

12号住居跡（第27図、図版2）

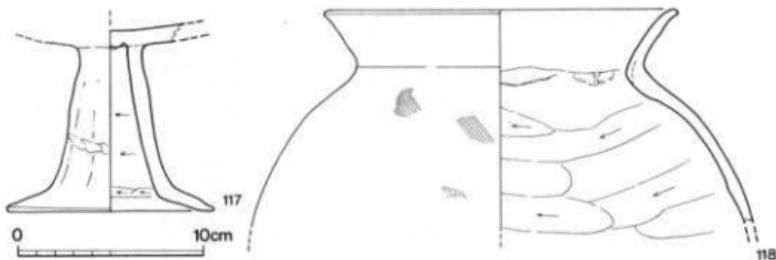
5号周溝を切っている。平面の形態は方形を呈しており、規模は5.5m×5.5mであり、壁高は40cmである。柱穴は規則的に配置された4本柱であり、柱間はすべて2.5mである。深さは48～62cmを測る。西壁に一部壁溝が見られるのみである。



第24図 11号住居跡実測図 (1/60)



第25図 11号住居跡出土土器実測図(1/3)



第26図 11号住居跡出土土器実測図(1/3)

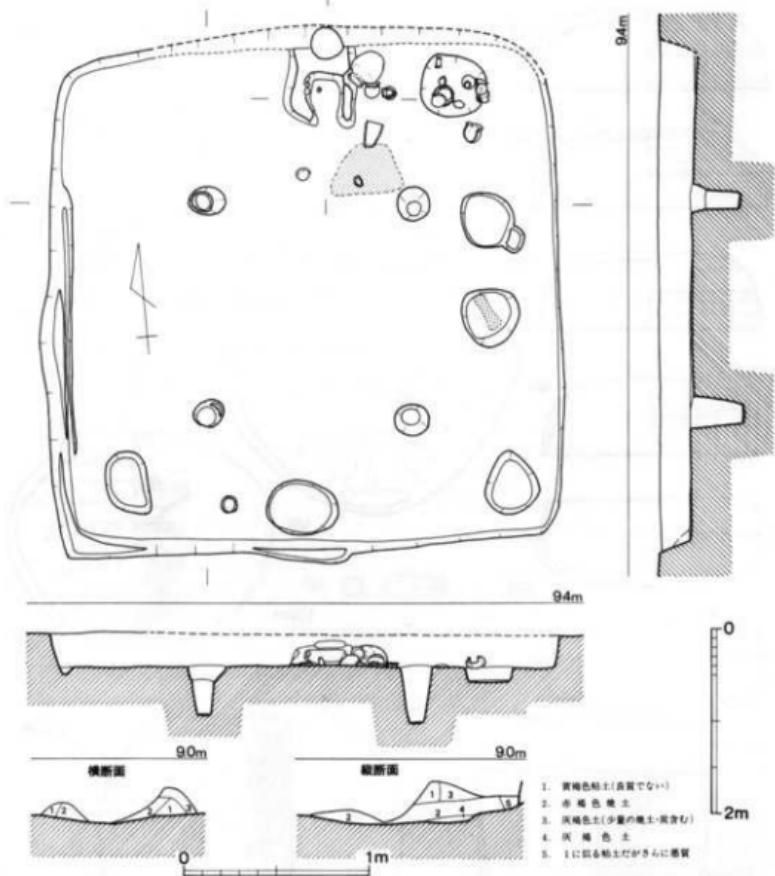
カマドは北壁の中央部に付設されている。袖は黄褐色粘土で構築されており、焚口部は破壊されているが、中央部に土製支脚が立っており煙道部が確認された。煙道部底面は緩く上昇し、天井までの高さは10cm、長さ55cmを測る。5号周溝の埋土も当該住居跡埋土と同じ黒ボクであるため煙道部の円筒状の立ち上がりは確認できなかった。カマドの右袖側付近には土器器蓋、瓶等が散乱していた。主軸はN-5°-Eである。須恵器蓋杯は全体的に天井、底部が平坦で、口縁端部内面も内傾するが、段をなすほどなく凹凸しているものであり、陶邑I型式3段階に比定される。年代は出土した土器から5世紀中頃と思われる。

出土遺物 (第28図、図版21)

須恵器 (119~124) 119~122は杯蓋である。天井部と口縁部の境は段がつき、鋭く綾が入る。口縁端部は内傾し、凹凸している。

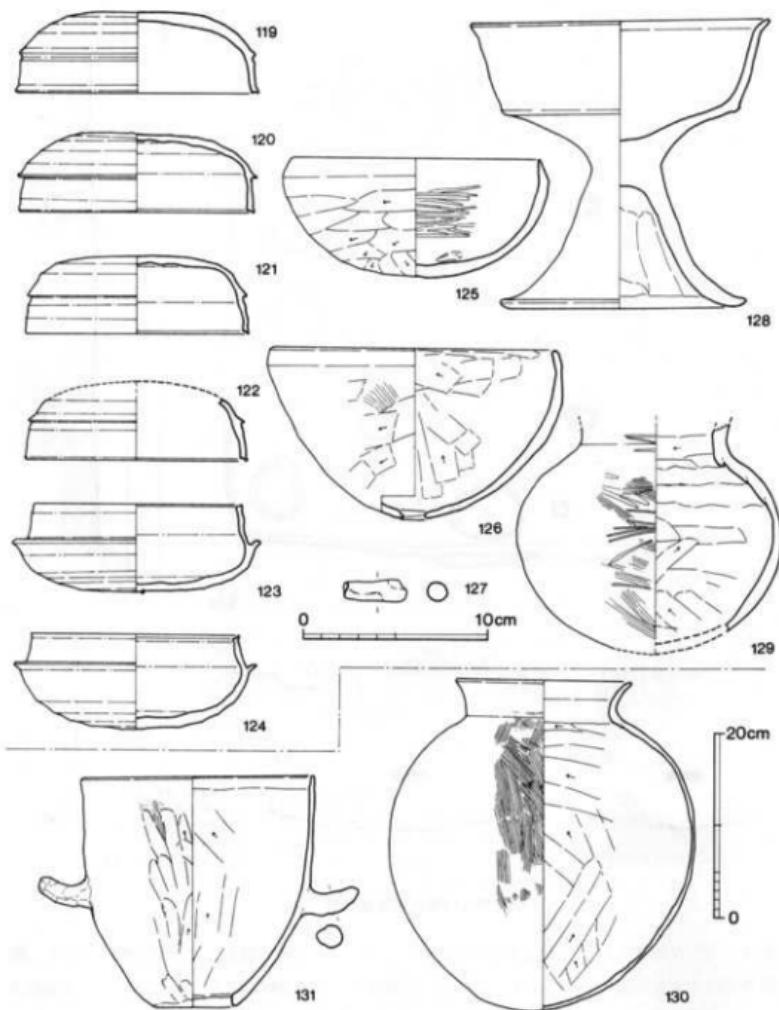
天井部外面は広範囲に回転ヘラ削りし、平坦面を有する。120のみ頂部周辺の小範囲に静止ヘラ削りを施している。口径12~13.1cm、器高4.2~4.4cmである。123、124は杯身である。立ち上がりは緩く内傾しており、口縁端部の形態は123は内傾する平坦面であり、124は内傾する平坦面を凹ませている。底部外面は広範囲に回転ヘラ削りし平坦である。123は口径11.3cm、立上り高2.1cm、蓋受け部径13.4cm、器高4.8cmである。124は口径11.3cm、立上り高1.7cm、蓋受け部径13.2cm、器高5.4cmである。いづれも陶邑I型式3段階に属すると思われる。

土師器 (125~130) 125は碗であり、口縁部を内傾させ、端部は尖る。器高の高い碗であり、体部から底部にかけての広範囲を静止ヘラ削りし、内面は粗いヘラ磨き調整する。126は碗形の盤であり、底部に径1cm大的孔を穿っている。外面ともヘラ削り仕上げである。口径15.5cm、器高9.3cmである。127は断面円形のもので用途不明品である。128は高杯であり、体部と底部の境に屈折面を有する。体部は緩く外反し、口縁部を急激に外反させ端部はやや尖る。脚部はラッパ状に裾がひろがる形態であり、端部は尖り気味となる。脚部内面はヘラ削りする。口径16.2cm、器高15.4cm、底径13.3cmである。129は壺である。胴部外面はハケ目調整後に難なヘラ磨きを施し、内

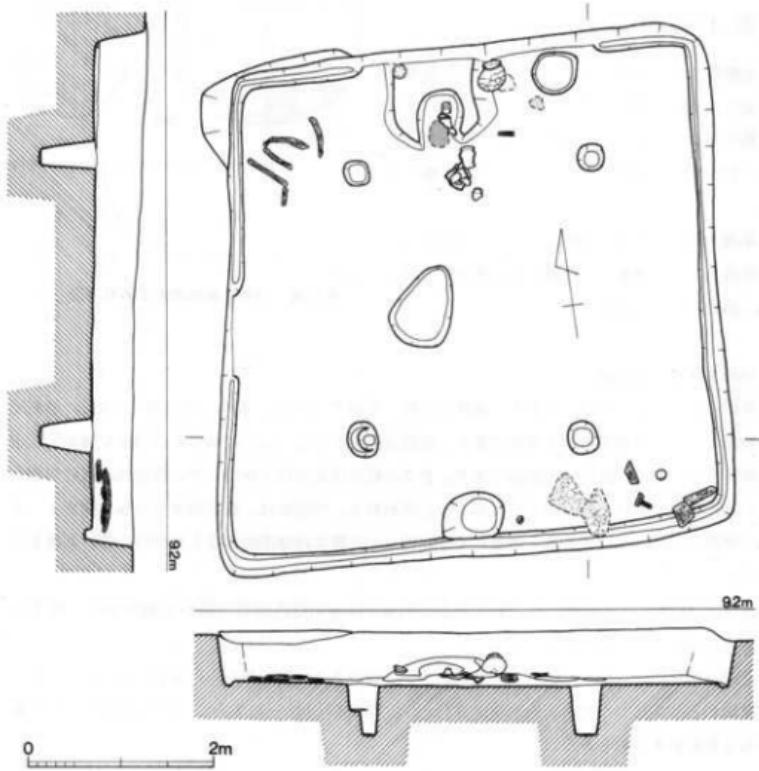


第27図 12号住居跡実測図(1/60)

面はヘラ削り調整する。130は甕の完形品であり、カマドの右脇で横転した状態で検出された。胴部外面はハケ目調整後部分的にナデしている。内面はヘラ削り調整である。口径18.7cm、器高35.3cm、胴部最大径33cmである。131は瓶であり、底部に径7.5cmの孔がある。胴部中位より僅かに下位に把手がつき、把手上面の胴部は直立気味に口縁部へ移行する。口縁部は丸く仕上げている。内面はヘラ削りし、外面は指頭ナデ、ヘラ削り後、ハケと横ナデ調整している。



第28図 12号住居跡出土土器実測図 (1/3, 1/6)



第29図 13号住居跡実測図 (1/60)

13号住居跡 (第29図、図版 8)

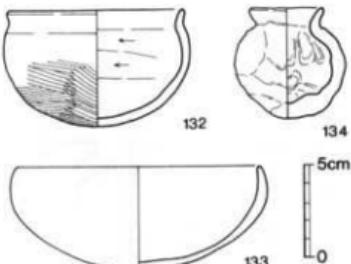
平面の形態を方形を呈しており、規模は長軸（南北壁）5.5m、短軸（東西壁）5.25m、壁高58cmを測る。柱穴は規則的な4本柱であり、柱間は長軸3.0m、短軸2.4～2.5m、深さ55～60cmを測る。四壁にはカマド部分を除いて、深さ3～5cmの浅い壁溝が巡る。

カマドは北壁の中央部に付設されており、中央部には土製支脚が立つ。焚口は幅50cmであり、袖は高さ25cm程遺存している。カマド全面には甕が、また右袖には甕が横転して検出された。北西と南東コーナー付近からは炭化材が検出されたが量は少い。主軸はN-9°-Eである。年代は出土遺物から5世紀中頃と思われる。

出土遺物（第30図、図版21）

土師器 132、133は碗であり、132は口縁部が外反し、133は内湾する形態のものである。132は体部内面はヘラ削りし、外面は粗いハケ目が入る。133は器表が磨滅していて調整は不明瞭である。

手捏土器 134は壺を模造したものと思われる。外面ともナデ調整し、指頭圧痕が残る。口径4cm、器高5.9cmである。



第30図 13号住居跡出土土器実測図（1/3）

14号住居跡（第31図）

平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸（東西壁）6.1m、短軸（南北壁）5.8m、壁高55cmを測る。柱穴は規則的な4本柱であり、柱間は長軸2.6～2.7m、短軸2.3～2.4mを測る。柱穴の深さは50～62cm、底径15～20cmであり、P2の柱穴は完全に土が詰らず、直径10cm程の空洞が見られ、柱材の大きさを表わしているものと思われる。四壁には、底面幅6～15cm、深さ4～9cmの壁溝が巡る。北壁中央部と西壁のやや北寄りの位置には壁面に直交した平行にのびる溝を有する。

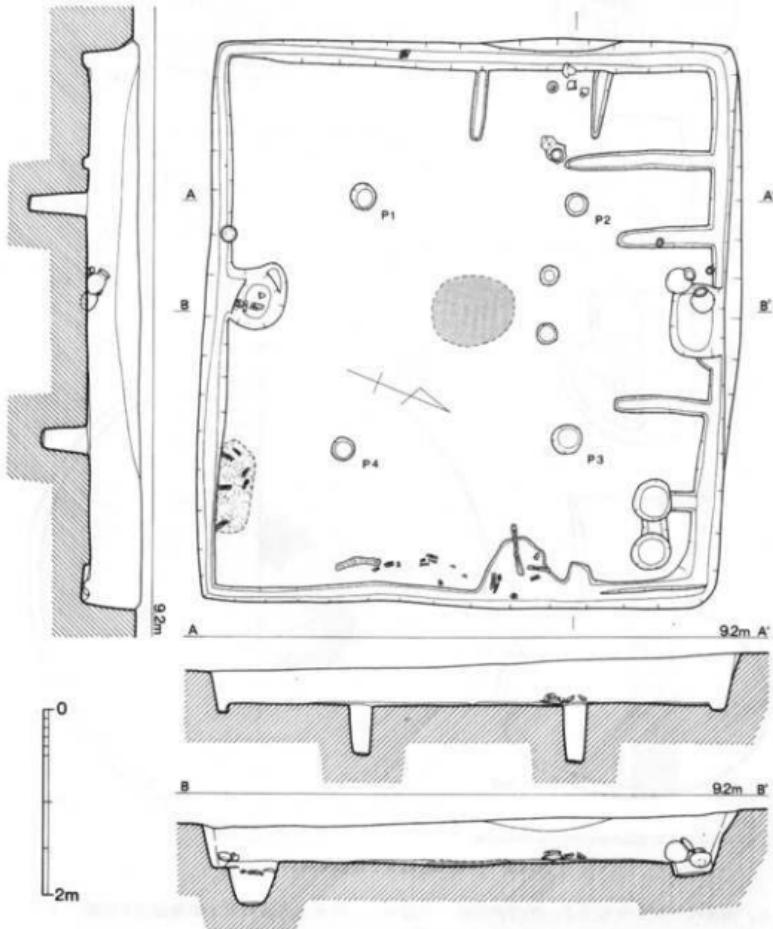
カマドは付設しておらず、住居跡中央部は90cm×75cmで椭円形状の浅い土壇があり、焼土が詰っている点から炉跡と思われる。

北壁と南壁の中央部には隅丸長方形の浅い土壇があり、周辺部からは完形土器が出土した。東壁際からは炭化した木材と灰が検出された。主軸はN-68°-Eである。年代は出土した土器から5世紀前半と思われる。

出土遺物（第32図、図版22）

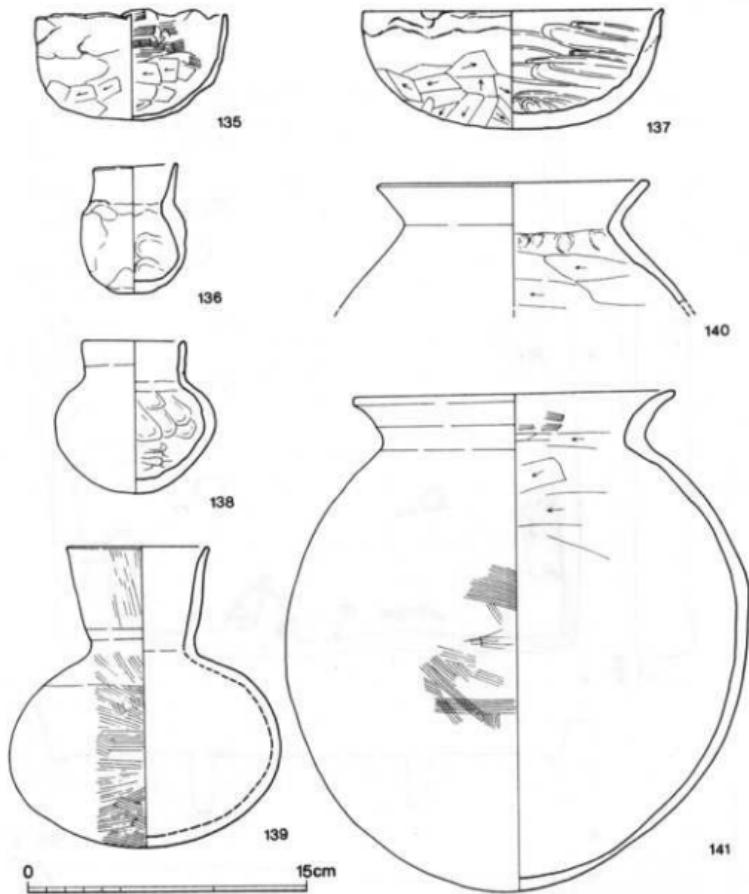
手捏土器 135は鉢を模造したものであり、器壁は一様に薄い。口縁部は水平でなく波状を呈している。外面の下半部はヘラ削り、上半部はナデ調整である。内面の下半部はヘラ削りし、上半部は細かいハケ目が入る。口径11cm、器高5.9cmである。136は壺を模造したものと思われる。頸基部に粘土の接合痕を残し、この部分の器壁が最も厚い。外面ともナデ調整である。口径4.6cm、器高6.8cmである。

土師器 137は碗であり、口縁部を短く外反させ、端部は尖る。体部内面は指頭ナデ調整し、外面はヘラ削り調整が大半であり、口縁部周辺はナデ調整する。器壁が厚く重い土器である。口径16.3cm、器高6.4cm。138は小型丸底土器であり、口縁部は直立する。胸部内面は指頭ナデ調整



第31図 14号住居跡実測図 (1/60)

し、外面は磨滅気味であるがナデ調整しているのがわかる。139は緩く外反する長頸の壺であり、頸部中央部は僅かに膨み、頸基部は凹曲する。胴部は扁球形を呈し、外面はハケ目調整する。口径7.7cm、器高16.2cm、胴部最大径14.6cmである。140、141は壺である。140はくの字状口縁を呈

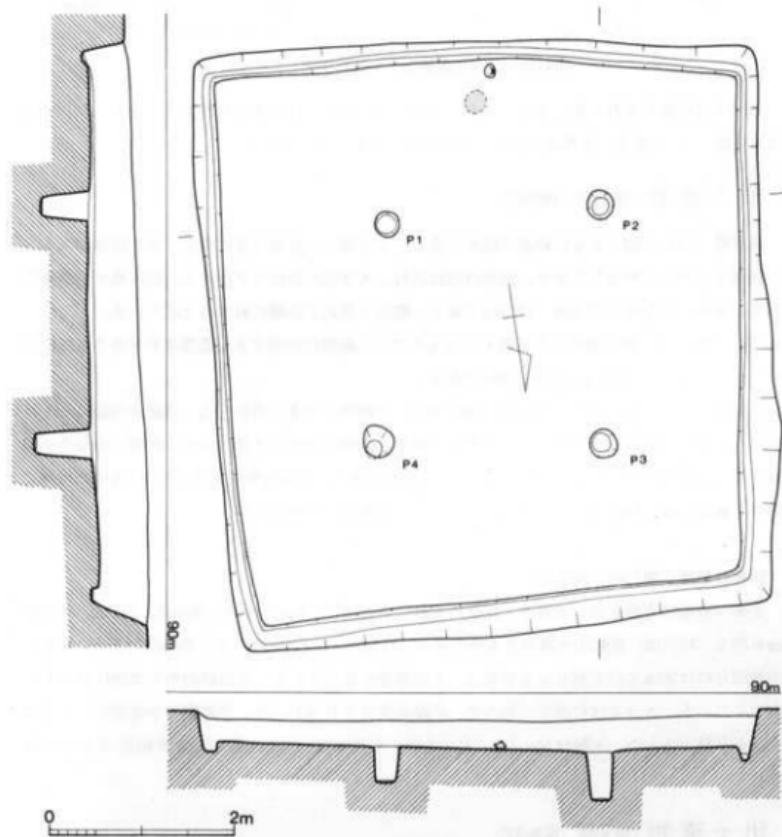


第32図 14号住居跡出土土器実測図(1/3)

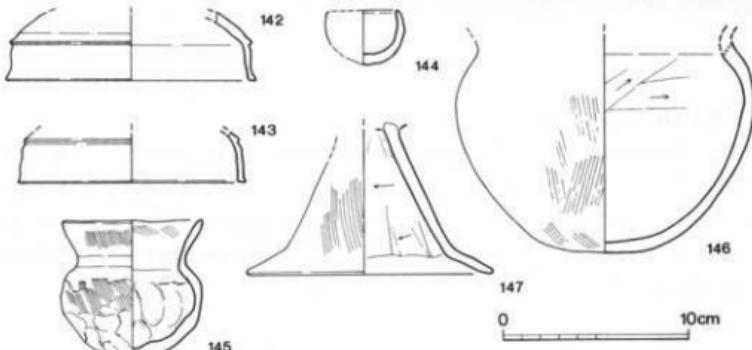
し、端部は平坦面を有する。胸部内面はヘラ削りし、外面は磨滅のため調整法は不明瞭である。141は外彌する口縁部を有し、基部は最も器壁が厚い。胸部内面はヘラ削り、口縁部内面はハケ目が入る。外面は剥落しているが、細かいハケ目が部分的に見られる。口径17.3cm、器高27cm、胸部最大径25cmである。

15号住居跡（第33図、図版10）

平面の形態は方形を呈しているが、東壁が若干長いため整った形態とは言えない。規模は長軸（南北壁）6.5m、短軸（東西壁）6.0m、壁高55cmを測る。柱穴はほぼ真四角に配置された4本柱であり、柱間はP1～P2 2.4m、P2～P3 2.6m、P3～P4 2.5m、P1～P4 2.5mを測りP1が若干不規則な位置にある。柱穴の深さは37～60cmである。四壁には底面幅6～14cm、深さ6～10cmの壁溝がめぐる。



第33図 15号住居跡実測図(1/60)



第34図 15号住居跡出土土器実測図(1/3)

カマドは付設しておらず、また、床面には炉跡と思われる様な焼土も検出されなかった。主軸はN-90°-Eである。年代は出土した土器から5世紀中頃と思われる。

出土遺物(第34図、図版22)

須恵器(142、143)ともに杯蓋の破片である。天井部と口縁部の境に段がつき、稜線が入る。口縁端部は僅かに外反しており、端部内面は凹む。天井部外面はヘラ削りし、他は横ナデ調整である。復原口径は各々13.5cm、12.3cmである。陶邑I型式3段階に属すると思われる。

手捏土器(144)碗を模造したもので、口縁部は内湾する。底部はやや尖り気味につくられている。口径3.9cm、器高2.9cmである。

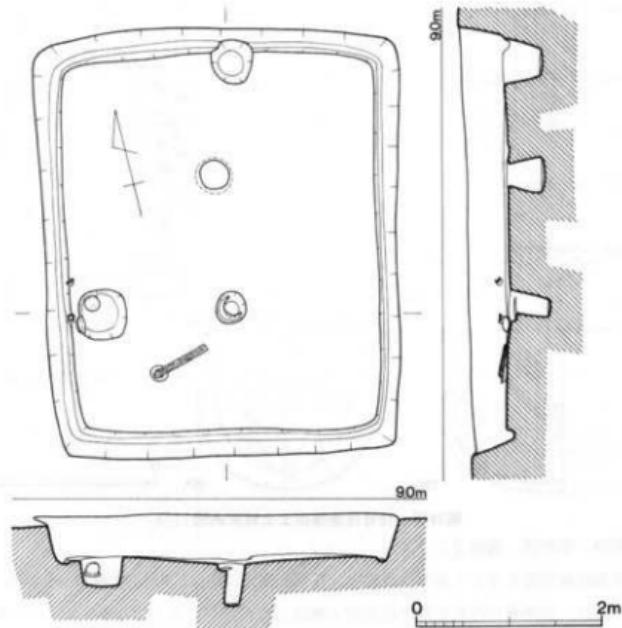
土師器(145~147)145は小型丸底土器であり、口縁部は大きく外反する。口縁部内面はハケ目があり、胴部は指頭ナデ調整する。外面は口縁部と胴部中央にハケ目があり、底部は指頭ナデ調整する。146は甕であり、口頸部を欠損する。底部は僅かに平底気味である。147は高杯の脚部であり、裾部は鋭く屈折する。内面はヘラ削りし、外面はハケ目に入る。

16号住居跡(第35図、図版10)

平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸(南北壁)4.6m、短軸(東西壁)3.8m、壁高50cmを測る。柱穴は、長軸中央線の2本柱であり、柱間は1.5m、柱穴の深さ45cm程である。西壁の南側部分には50cm大方形ピットがあり、土師器甕が検出された。住居跡内からは炭化材が若干出土している。カマドは付設しておらず、炉跡も検出されなかった。東壁際の中央部からは手捏土器が2個出土した。主軸はN-14°-Eである。年代は出土した土器から5世紀前半と思われる。

出土遺物(第36図、図版22)

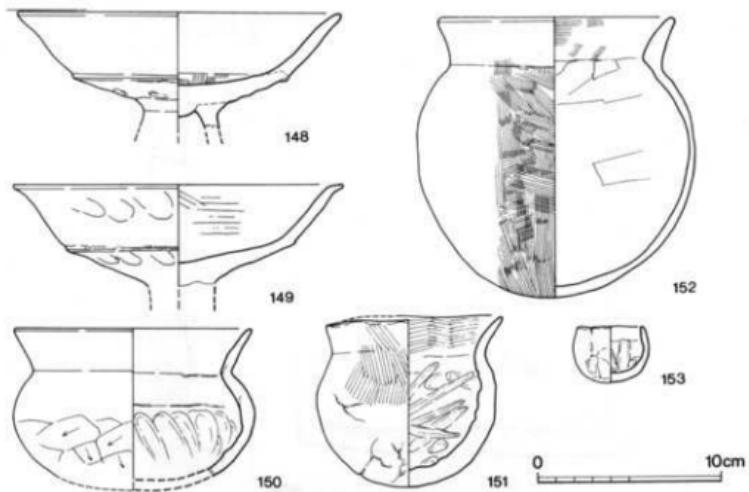
土師器(148~152)148、149は高杯であり、脚部を欠損する。底部と体部の境は屈折し、稜線



第35図 16号住居跡実測図(1/60)

が入る。体部は大きく外反し、口縁部で屈折し、149は平坦面を有する。底部は指頭による押えの凹凸が残り一部にハケ目が入る。とともに杯部内面に粗いハケ目上をナデしている。150、151は壺である。150は扁球形の胴部に大きく外反する口縁部を有しており、胴部内面は指頭ナデ、外底部はヘラ削り調整している。151は厚手造りの土器であり、口縁部内面は粗い横ハケ目が入り、胴部内面は指頭ナデ調整する。外面は、内面と同じく粗いハケ目が入る。152は壺であり、くの字状に鋭く外反する口縁部は厚手造りである。胴部は均整のとれた薄手の器壁に仕上げられており、外面は細かいハケ目が、内面はヘラ削りする。口縁部内面は細かいハケ目が一部に入る。口径13cm、器高15.3cmである。

手捏土器（153）椀を模造したものであり、口縁部は内傾する。内外面ともにナデ調整している。口径3.5cm、器高3cmである。



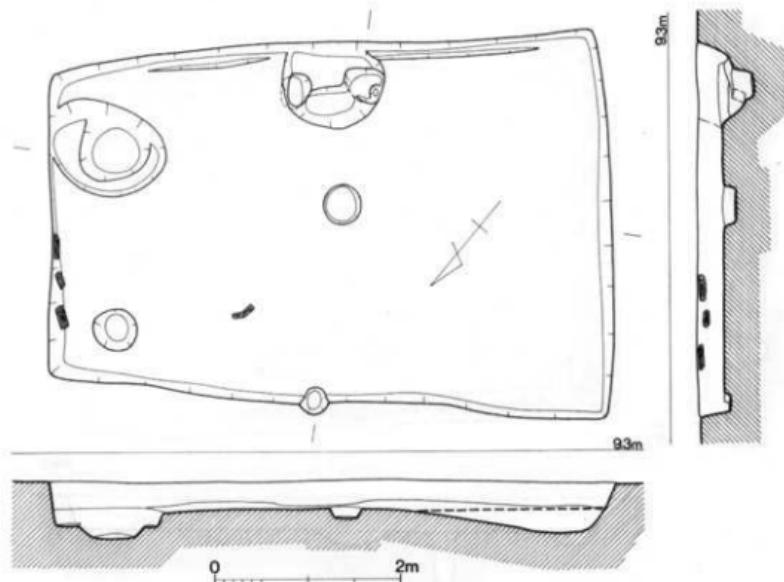
第36図 16号住居跡出土土器実測図(1/3)

17号住居跡（第37図、図版3）

平面の形態は長方形を呈しており、規模は、長軸6.05m、短軸3.9m、壁高30cmを測る。主柱穴は不明瞭であり、遺構検出作業の際に注意深く検討したが、見い出しえなかつた。東北壁の中央部には梢円形土壙があり、両端部には内傾して掘られたビットが所在する。主軸はN-40°-Eである。遺物は出土していないが、弥生時代後期前半と思われる。

18号住居跡（第38図、図版10）

17号住居跡の北西で、これとはほぼ平行に位置している。平面の形態は長方形を呈しており、規模は長軸6.0m、短軸4.15m、壁高35mを測る。柱穴は2本柱と思われるが南側のP1のみで北側は検出されなかつた。P1は深さ53cm、底径16cmである。長軸上の両壁近くには各々1個のビットがあり、柱穴になる可能性があるが、深さはいづれも10cm程度と浅い。北東壁を除く3壁には深さ5cm程の壁溝がめぐっている。住居跡の中央部には直径80~85cm、深さ15cmで鉢形の断面形をした円形土壙がみられるが、焼土は詰っていないかった。住居跡西コーナー部には床面から10~20cm程浮遊した状態で土器がまとめて出土したが、住居廃棄後に間もなく投げ込まれたものであろう。主軸はN-38°-Eである。年代は出土した土器から弥生時代後期前半と思われる。

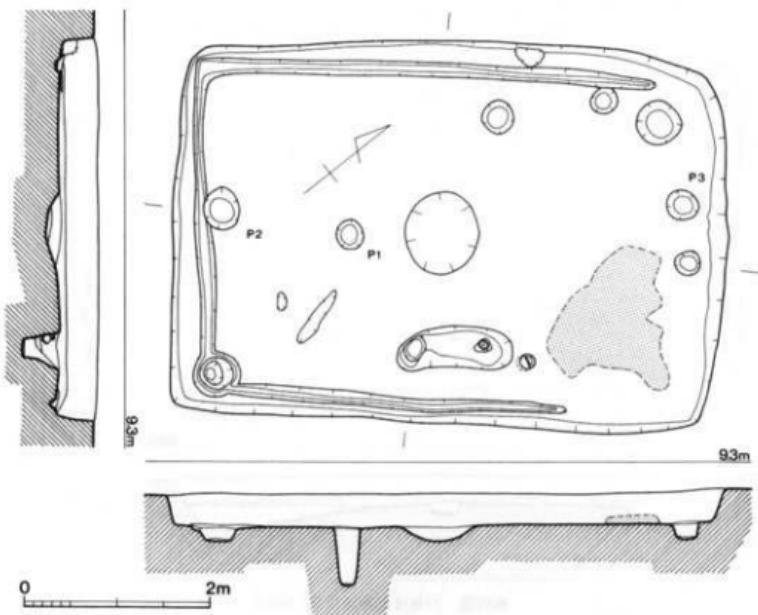


第37図 17号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第39・48図、図版22)

石器 (第48図) 6は安山岩製の凹石であり、中央部に径2.5cm、深さ1.5mmの敲打による凹みが入るもので、裏面には凹みはない。7、8は砥石である。7は粘板岩製の仕上げ砥であり1面のみ使用している。8は粘板岩製の仕上げ砥であり3面を使用している。

土器 (第39図) 住居跡発掘後に土器を留めて使用されており、多量の土器が出土した。154は手捏ねのミニチャエ鉢の完形品である。内外面ともにナデ調整する。口径6.5cm、器高3.3cmである。155は小型の甕完形品である。口縁部は外反する丈の低いものであり、端部は丸い。底部は平坦で僅かに丸味をもつ。外面はハケ目、内面はヘラ磨き調整している。口径10cm、器高11.5cmである。156は大型の器台であり、口縁部は大きく外反し、脚部はラッパ状にひらく。外面は縦ハケ目が入り、内面はハケ目の上をナデしている。口径17.2cm、器高22.6cm、底径19.5cmである。157は袋状口縁の壺であり、頸基部と胴部中位に三角凸帯を貼付している。底部はわずかに丸味を有した平底である。外面は全面に縦ハケ目があり、胴部中位はナデしている。内面の口縁部は横ハケ目

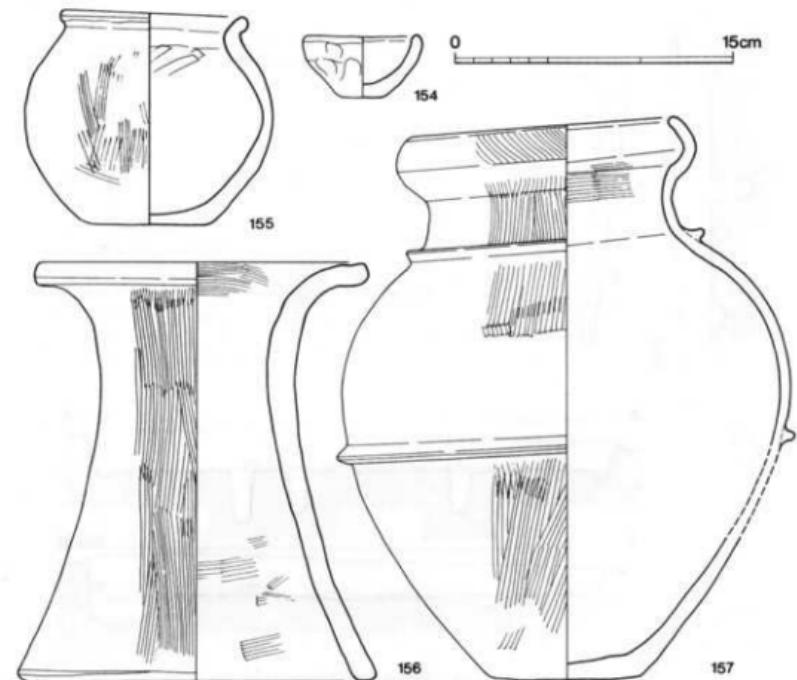


第38図 18号住居跡実測図 (1/60)

が入り、胴部はナデ調整する。口径14cm、器高29.8cm、胴部最大径24.6cmである。胎土には雲母、砂粒を含む。底部と胴部中位は一部黒化している。

19号住居跡 (第40図)

発掘区の北西端部から検出されたものであり、西側半分は段落ちで削平されている。南北壁は長さ5.75m、壁高42cmである。柱穴は4本柱であると思われるもので、東側の2個のみ検出された。柱間は2.3mであり、柱穴の深さは48~56cmである。壁際には底面幅4~10cm、深さ6~10cmの壁溝が巡る。南壁の中央部には長さ1m×0.7m、深さ30cmで長方形を呈する土壤がある。住居跡中央部の2カ所に火熱により赤変した部分があり、炉跡が所在したものと思われる。主軸はN-12°-Wである。年代は出土した土器から5世紀前半と思われる。なお小片であるが住居跡内からは線刻された埴輪片が出土しており、盾形埴輪片(第42図)かと思われる。

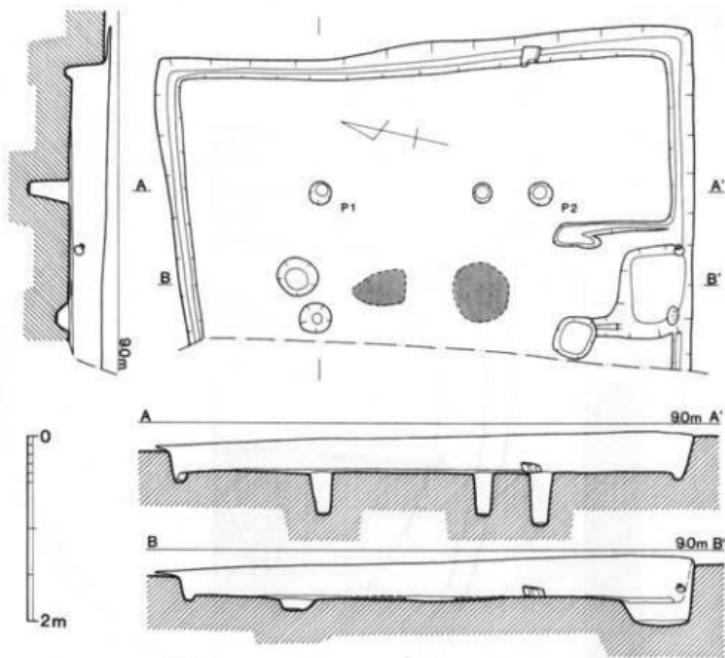


第39図 18号住居跡出土土器実測図(1/3)

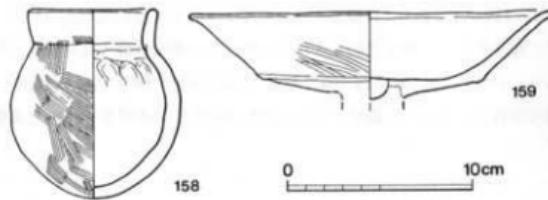
出土遺物 (第41・42・48図、図版22)

石器(第48図)9は泥岩製の荒砥であり、4面とも使用している。

土師器(第41図)158は壺であり、口縁部は僅かに外反するが垂直に近いものであり、端部は丸くつくられている。頸基部内面に粘土の接合痕が見られ、直下部に指頭圧痕が残る。胸部外面は細かいハケ目が入る。口径7.1cm、器高10.2cmである。159は高杯の杯部であり、底部と体部の境は段がつく。体部は直線的に外反し口縁部を外方へ屈折させる。外面は粗いハケ目調整している。



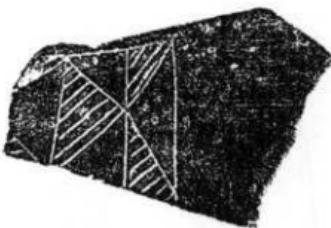
第40図 15号住居跡実測図(1/60)



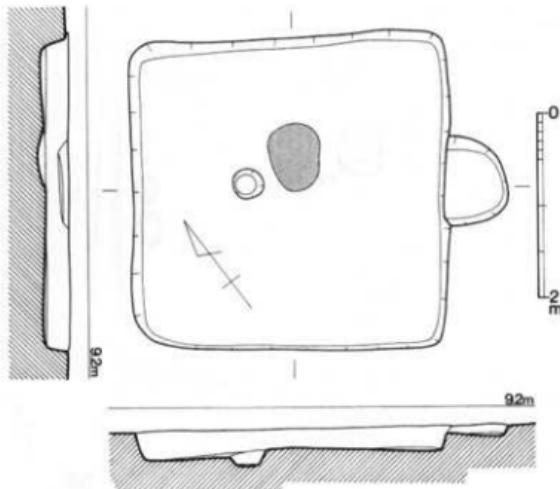
第41図 15号住居跡出土土器実測図(1/3)

20号住居跡（第43図）

平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸・短軸ともに3.4m、壁高30cmを測る。柱穴は1個しか検出されておらず、深さ15cm、底径25cmである。住居跡中央部付近には長さ75cm×55cm、深さ10cm程の椭円形土壇があり、焼土の詰った底面は赤色でガチガチに焼け固っており、炉跡と思われる。主軸はN-53°-Wである。年代は不明であるが、弥生土器片が若干混入しているため、他の弥生住居跡と近い年代が考えられる。



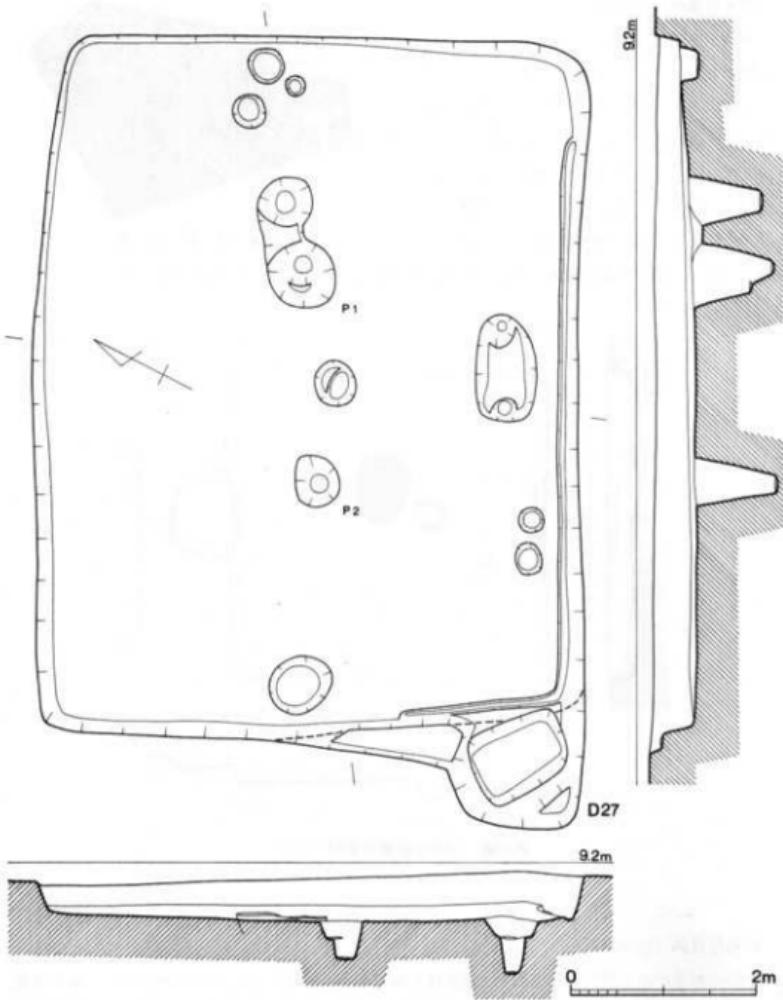
第42図 線 割 拓 影 (1/2)



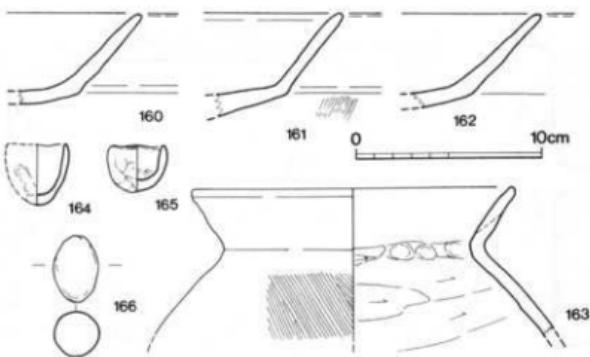
第43図 20号住居跡実測図 (1/60)

21号住居跡（第44図）

平面の形態は長方形を呈しており、規模は長軸7.65m、短軸5.9m、壁高50cmを測る。柱穴は長軸中央線上の2本柱であり、柱間は2.4m、深さ85~88cmと深いものである。壁溝は南壁と南西コーナー部分に一部巡る。主軸はN-63°-Eである。年代は出土した土器から5世紀前半と思われる。



第44図 21号住居跡実測図 (1/60)



第45図 21号住居跡出土土器実測図(1/3)

出土遺物 (第45図、図版22)

土師器 (160~163) 160~162は高杯の杯部破片である。いづれも底部と体部の境に屈折面を有し鈍く稜がつく。体部はほぼ直線的に外反して口縁となり、端部は丸い。163は壺であり、くの字状口縁を呈しており、口縁部中央部分は僅かに膨んでいる。頸基部は凹窓し、この部分の内面は指頭圧痕が残る。胴部外面は斜めのハケ目があり、内面はヘラ削りする。

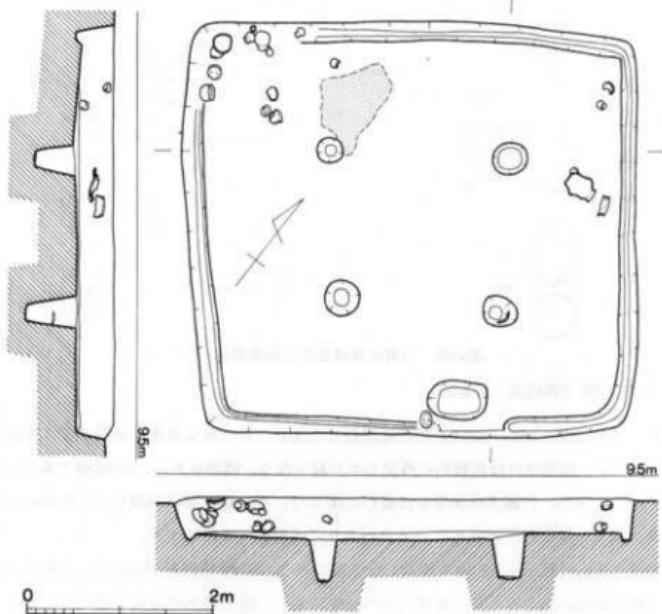
手捏土器 (164・165) ともに腕を模造した土器であり、164は底部がやや尖る。内外面ともに指頭ナデ調整である。両者ともに口縁部は尖り気味であり、端部は水平でなく波状を呈する。

166は投弾であり、他の弥生土器ととともに流れ込んだものである。長軸3.5cm、短軸2.4cmを測る。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。

22号住居跡 (第46図、図版9)

発掘区の東側端部付近に1軒だけ離れて検出された。平面の形態は方形を呈しており、規模は長軸4.72m、短軸4.45m、壁高45cmを測る。柱穴は規則的な4本柱であり、柱間は長軸1.75~1.8m、短軸1.75m、柱穴の深さ45~55cmである。四壁には底面幅4~10cm、深さ4~8cmの壁溝が巡る。

カマドは付設しておらず、炉跡も検出されなかった。住居跡の西・北壁コーナー部と東壁コーナー部からは土器がまとまって検出された。主軸はN-53°-Eである。年代は出土した土器から5世紀前半と思われる。

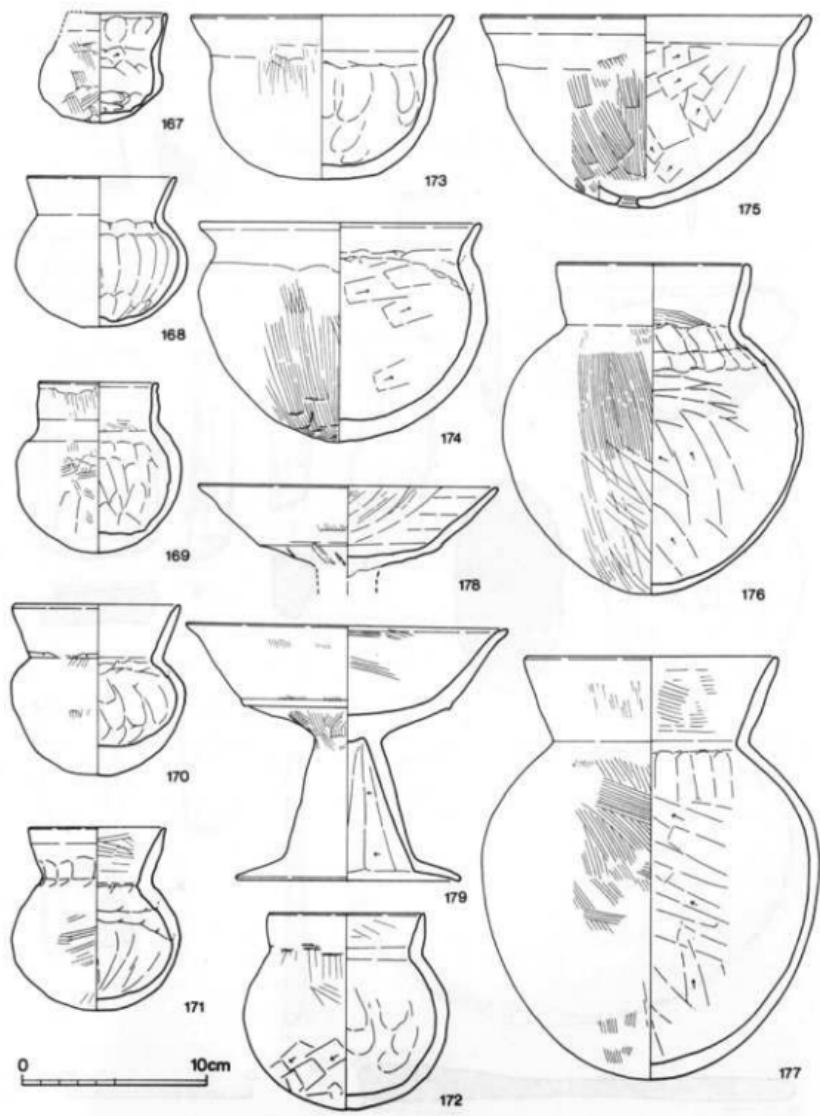


第46図 22号住居跡実測図(1/60)

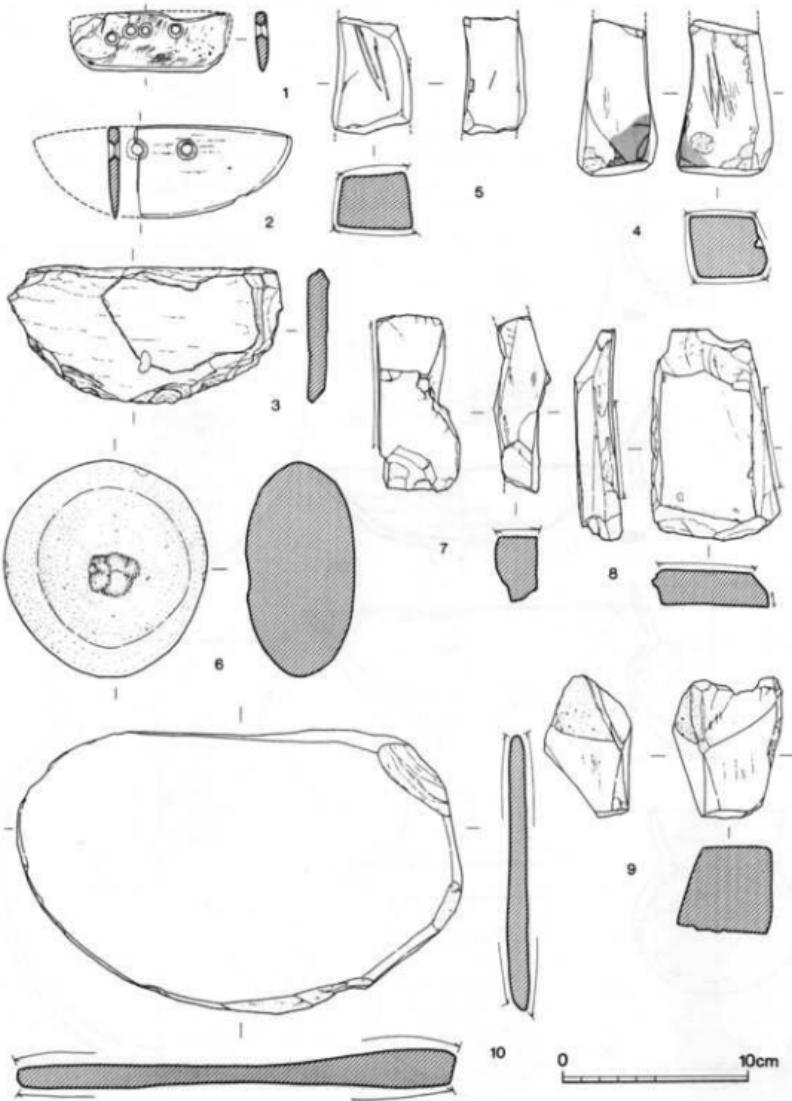
出土遺物 (第47図、図版23)

手捏土器（167）甕か鉢を模造したものと思われるもので若干歪んでいる。胴部内面はヘラ削り、指頭ナデ調整し、外面は粗いハケ目調整している。

土師器（168～179）168～172は小型丸底土器である。169は口縁部を直立するが、他の土器は直線的に外反するもので、口縁端部はやや尖る。169、171、172は口縁部内面に粗いハケ目が入る。いづれの土器も胴部内面は指頭ナデ調整し、外面はハケ目が入る。172は底部はヘラ削り調整である。173～174は鉢であり口縁部は外反する。173の器壁は一様なつくりであるが174は体部上半部は厚手造りである。173は内面は指頭ナデ、外面は粗いハケ目が入る。174は内面は削り、外面は粗いハケ目が入る。175は鉢形土器の底部に孔を穿った瓶である。体部内面はヘラ削り、外面はハケ目が入る。口径18cm、器高10.5cmである。176、177は壺であり、口縁部は外反し、端部は平坦に近い。両者とも口縁は直線でなく緩く凹凸を有する。176は胴部は薄く仕上げられ、外面は粗いハケ目、内面はヘラ削りする。口径10.6cm、器高18cmである。177は口縁部内面は横ハケ目が入



第47図 22号住居跡出土土器実測図(1/3)

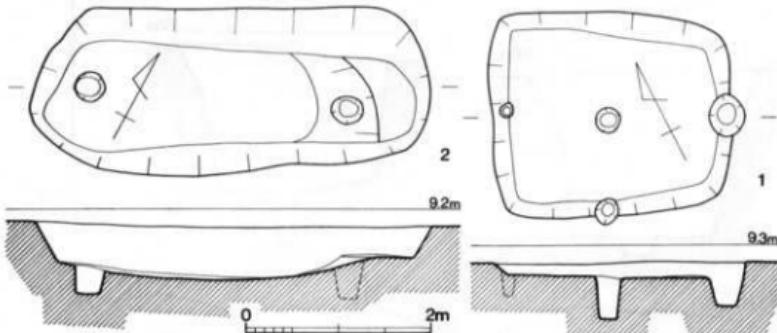


第48図 住居跡、周溝状造構出土石器実測図 (1/3)

り胴部内面は、頸基部直下は指頭ナデが入り、他の部分はヘラ削りである。外面は全面にハケ目が入る。口径13.9cm、器高23cmである。178、179は高杯である。178は杯部の底部と体部の境に鈍く稜がつき、体部は直線的に外反する。179は底部と体部の境に凸帯状の張り出しがあり段がつく。外反する体部は、口縁部で外傾する。脚部は裾部で鋭く屈折し、端部は丸い。杯部内外面はハケ目、脚部内面はヘラ削り、外面はナデ調整である。口径17.5cm、器高14.1cm、底径12.3cmである。

2. 竪 穴 (第49図)

住居跡ではないが、他の土壤と異なって規模が大きいものを竪穴とした。1号竪穴は、平面の形態は方形であり、長軸2.6m、短軸2.25m、壁高17cmを測り浅い。土壤中央には深さ45cmのピットがあり、南西壁と、北西壁中央にも大小のピットがみられる。2号竪穴は隅丸長方形を呈しており、長軸4.3m、短軸1.8m、壁高35~45cmであり、中央部は凹窓している。両短辺の壁際には底径20~25cm、深さ30~40cmのピットがみられる。竪穴からは弥生土器片が若干出土したのみで年代は定かでない。

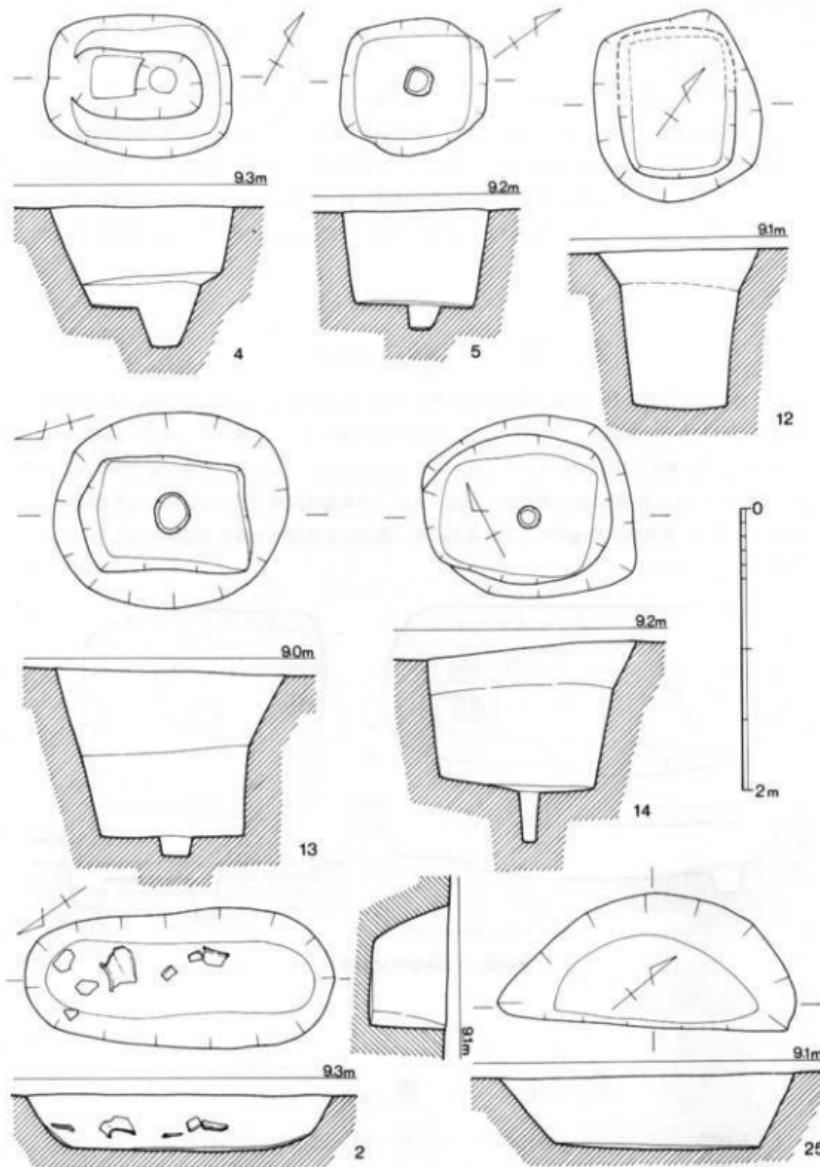


第49図 1・2号竪穴実測図 (1/60)

3. 土 壤 (第50図、図版11)

平面の形態は方形、長方形、隅丸長方形、半月形、不整形のものが見られる。

方形、長方形プランのものは4・5・12~15・27号土壤であり、壁面は垂直に近い勾配のもの



第50図 2・4・5・12~14・25号土壤実測図(1/40)

で落とし穴と思われる。最小規模の4号土壙は底面の長さ75cm、幅70cmであり、深さ65cmを測り、底面中央部に底径15cm、深さ15cmのピットが所在する。最大規模は14号土壙であり、底面の長さ1.1m、幅0.85m、深さ1.05mを測り、底面中央部には底径11cm、深さ35cmのピットがある。底面にピットをもたないものは12・15・27号土壙である。この落とし穴はその占地から2群に分けられ、東側の4・5号は概して浅く65~70cmの深さである。西側のグループは南から北へ5基がほぼ等間隔で一列に並んでおり、深さは1.05~1.16mと深いものである。耕作等による地山削平を考えると本来はあと50cm程度は深かったものと思われる。

隅丸長方形の土壙は2・10号土壙であり、いづれも弥生式土器が破棄された様な状態で検出された。2号土壙は長さ2.2m、幅1.0m、深さ40cmを測る。

半月形の土壙は7・28~35号土壙の9基であり、いづれも発掘区東側部分の住居跡の少い場所に集中して見られ、その配置に特に規則性は見られない。この土壙内には黒ボクが堆積しており、半月形の直線部分の壁面は垂直であり、片方は傾斜している。いづれの土壙からも遺物は全く出土していない。このうちの25号土壙は長さ2.1m、幅0.95m、深さ55cmであるが他の土壙は、長さ1.8~3.2m、幅0.85~1.2m、深さ63~98cmである。

4. 周溝状遺構 (第51, 54・55図、図版11~13)

円形と隅丸方形の2種類の平面形態があり、大きさにも大小の2種類が見られる。

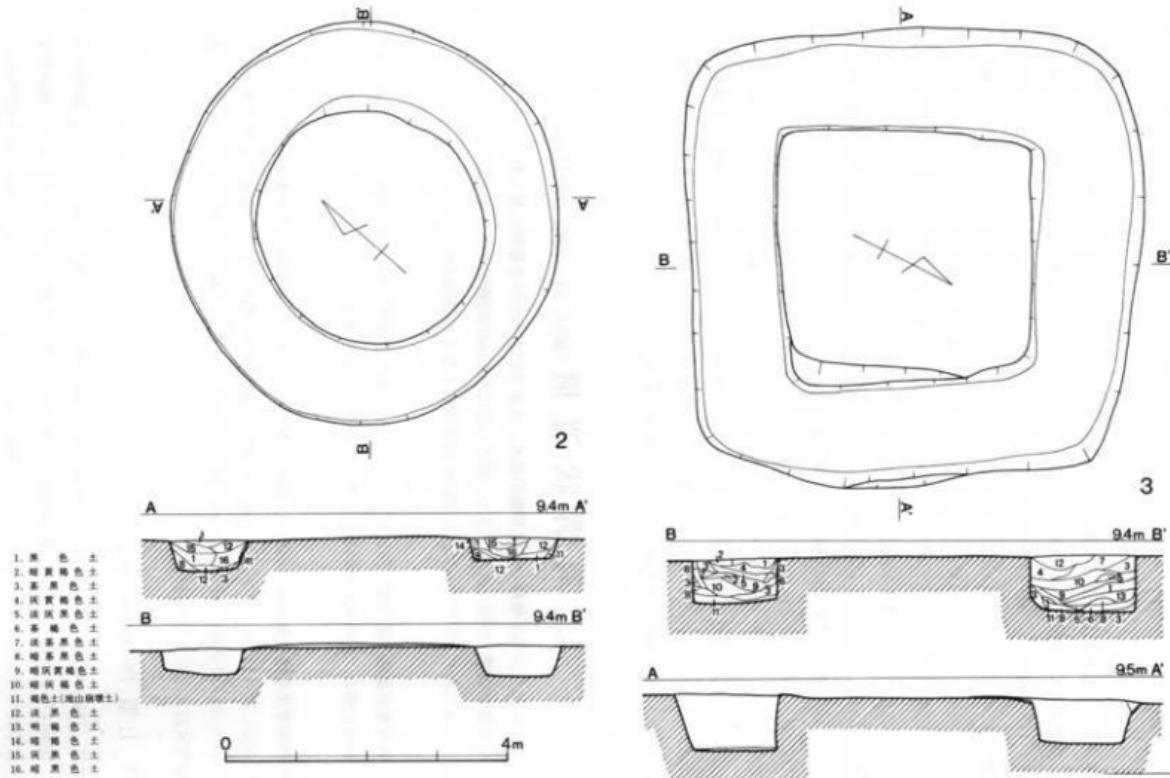
1号周溝状遺構 円形プランであり、溝の一部に幅60cmの陸橋がある。直径約3m×3.5m、深さ10~15cmであり、ブリッジに近い部分のみ若干深くなる。遺物は出土していない。

2号周溝状遺構 (第51図、図版11) 円形プランであり、直径5.3m、溝上面幅1~1.15m、深さ25~40cmを測る。溝の壁面は略垂直であり、底面も平坦である。

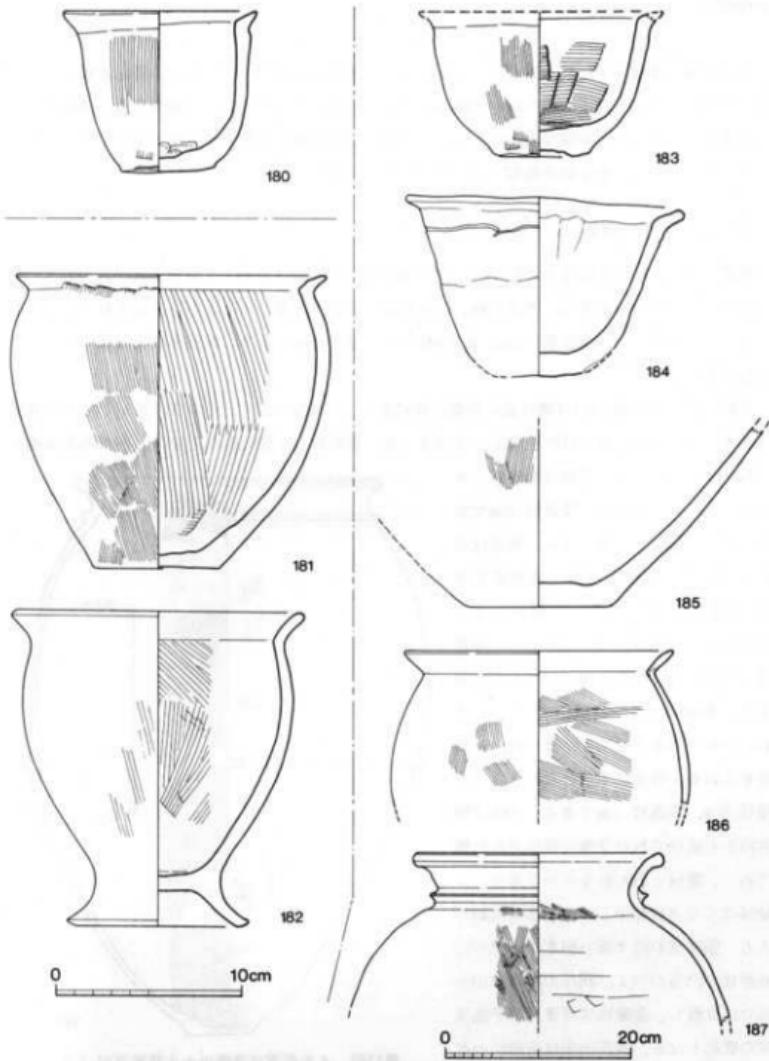
3号周溝状遺構 (第51図、図版12) 隅丸方形プランであり、中軸線上での長さ6.42m×6.5m、溝上面幅1.25×1.5m、深さ0.7~0.85mを測る。溝の壁面は垂直であり、底面は平坦である。一辺3.5×3.65mの方形台状部分には何ら掘り込みは見られない。溝内から出土した土器から、弥生時代後期前半のものと思われる。

出土遺物 (第52図、図版24)

土器 (180) 体部の深い鉢であり、体部上半部は緩く外反し、口縁部は鋭く屈折し、端部は尖る。底部は僅かに丸味をもつ。体部内面は丁寧なナデ、外面は縱ハケ目が入る。胎土に細砂粒を多く含み焼成は良好である。色調は淡茶~暗灰色を呈しており、つくりは全体に手捏ね的である。



第51図 2・3号周溝状造構実測図(1/80)



第52図 3・4・5号周溝状造構出土土器実測図 (1/3, 1/6)

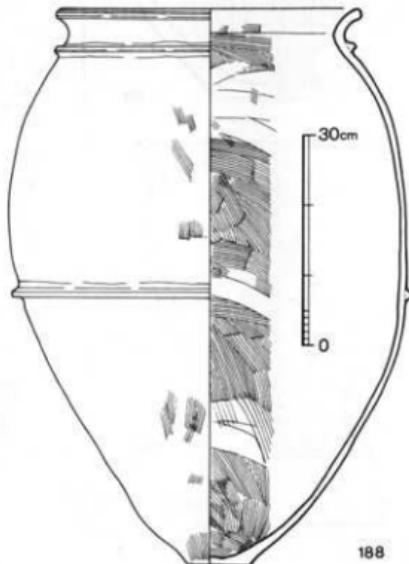
口径は10.4cm、器高8.7cmである。

4号周溝状遺構（第54図、図版12）円形プランであり、直径4.15～4.35m、溝上面幅0.8～0.9m、深さ40～45cmを測る。壁の断面は略垂直であり、底面は平坦である。溝西半部の溝底近くからは甕棺が破碎された状態で検出され、若干浮遊して台付甕が横転した状態で出土した。これらの土器から年代は、弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物（第48・52・53図、図版24）

石器（第48図）2は石庖丁であり、1/3を欠損する。半月形状を呈しており2孔がみられる。孔は両面より穿孔したもので、外径11mm、内径6mmである。刃部は両面から研ぎ出されてシャープであり、稜線がつく。現存長8.2cm、最大幅5.0cm、厚さ6mmであり、復原長は14cm程であろう。粘板岩製である。

土器（第52・53図）181は甕に近い形態の鉢であり、口縁部は鋭く、くの字状を呈しており端部は尖る。胴部の膨みは上位に位置し、すぼまって、僅かな上げ底の底部となる。胴部内面は極めて粗いハケ目が入り、外面は細かいハケ目が入る。口径16.8cm、器高15.9cmである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は灰黒色～淡褐色を呈す。182は台付甕である。口縁部はくの字状を呈し、基部内面は稜がつく。脚部はハの字状にひらき、端部は平坦面を有する。胴部内面は上半部にハケ目を入れ、これと交差させて下半部に粗いハケ目を入れる。外面にもハケ目が入る。口径15.8cm、器高17.1cmである。188は同溝内から破碎された状態で検出された甕であり、甕棺と思われるものである。口縁部はくの字状を呈し、口唇部に沈線が入る。頸基部の直下部と胴部中央部分に台形状の凸帯がつく。胴部の膨みは中央部分に位置し、急激にすぼまって平底気味の底部となる。胴部内面は全面にハケ目が明瞭に残り、外面はハケ目をナデて



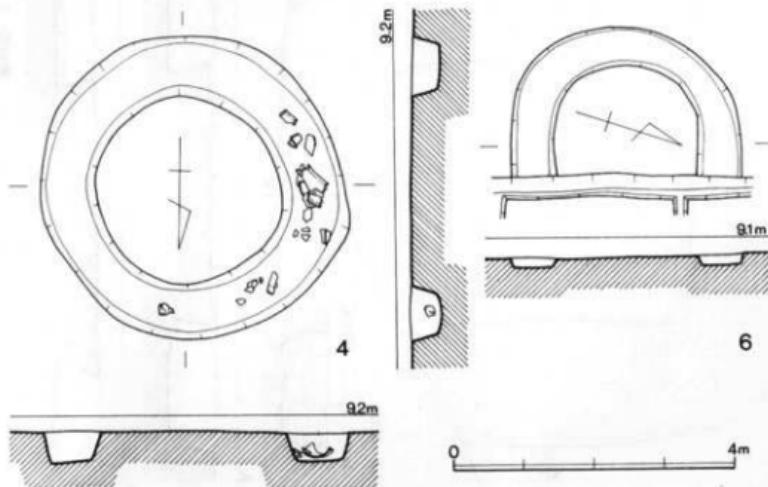
第53図 4号周溝状遺構出土土器実測図(1/8)

いるため、一部にしかハケ目が残らない。口径42.1cm、器高89cm、胴部最大径57.6cmである。胎土には小砂粒、雲母、角閃石、赤褐色粒を含み、焼成は良好である。色調は茶褐色～黄褐色を呈する。

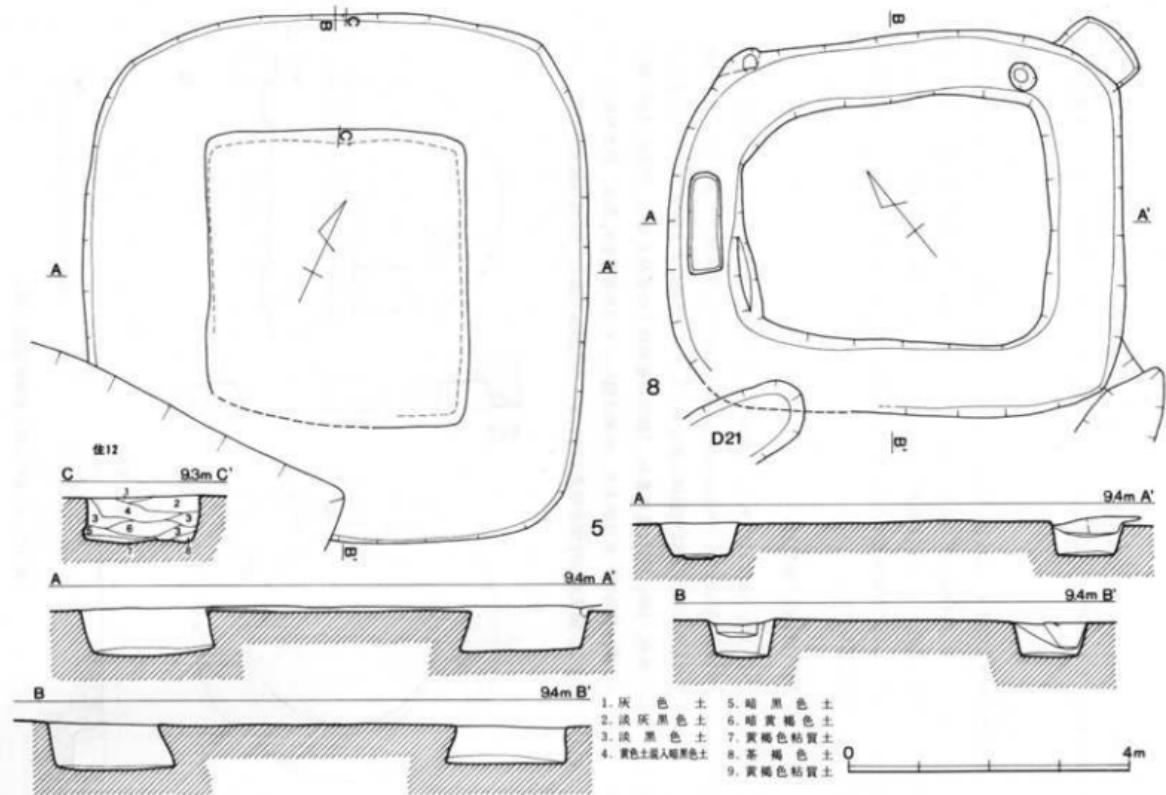
5号周溝状遺構（第55図、図版13）隅丸方形のプランであり南側のコーナー部分は12号住居跡により切られている。中軸線上での長さ7.2m×7.5m、溝上面幅1.8m、深さ50～60cmである。溝の断面は、内壁は垂直というよりも内側へ抉り込む様に掘られ、内壁は略垂直である。溝内、溝底から土器が出土した。台状部分には何ら掘り込みは見られない。出土した土器から、弥生時代後期前半の所産と思われる。

出土遺物（第52図、図版24）

土器（183～187）183・184は鉢であり、口縁部を大きく外側へ屈折させ、内面に稜がつく。底部は平底状を呈するが凹凸がつく。183は内面の底面は指頭ナデ、他は横ハケ目に入る。外面は縱ハケ目をナデて消している。184は内面は工具を用いたナデ、外面はナデ調整である。口径15.1cm、器高9.6cmである。186、187は壺である。186の口縁部はくの字状を呈し、内面には鋭く稜が入る。胴部内面は横、斜めのハケ目があり、外面は粗いハケ目が部分的に残る。胴部外面は二次火熱を受けて赤変し、頸基部には煤が付着している。口径29cmである。187は口縁部は外彎し、口



第54図 4・6号周溝状遺構実測図(1/80)



第55図 5・8号周溝状構造実測図(1/80)

唇部は平坦面を有する。頸基部に三角凸帯を貼付している。胸部内面は工具使用のナデを施し、外面はハケ目調整する。口径27.1cmである。

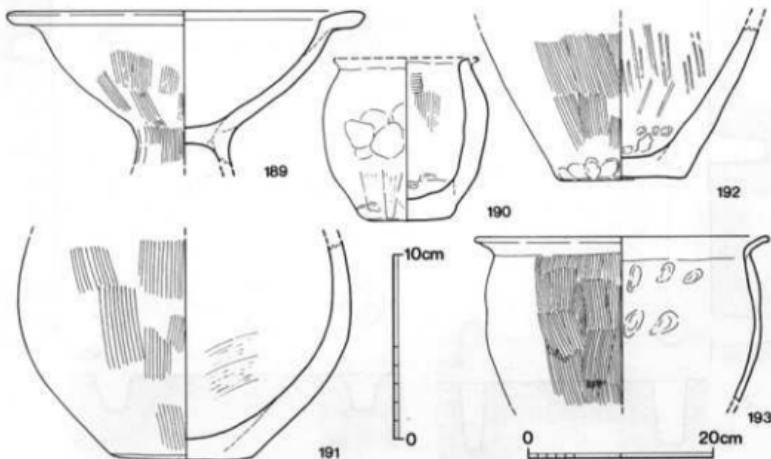
6号周溝状遺構（第54図）円形プランであり、11号住居跡に東半部を切られている。直径3.3m、溝上面幅55~62cm、深さ10~15cmを測る。遺物は出土していない。

7号周溝状遺構 6号周溝の北方8mに位置した円形プランの周溝である。直径2.2~2.5m、溝上面幅50cm、深さ6~15cmを測る。遺物は出土していない。

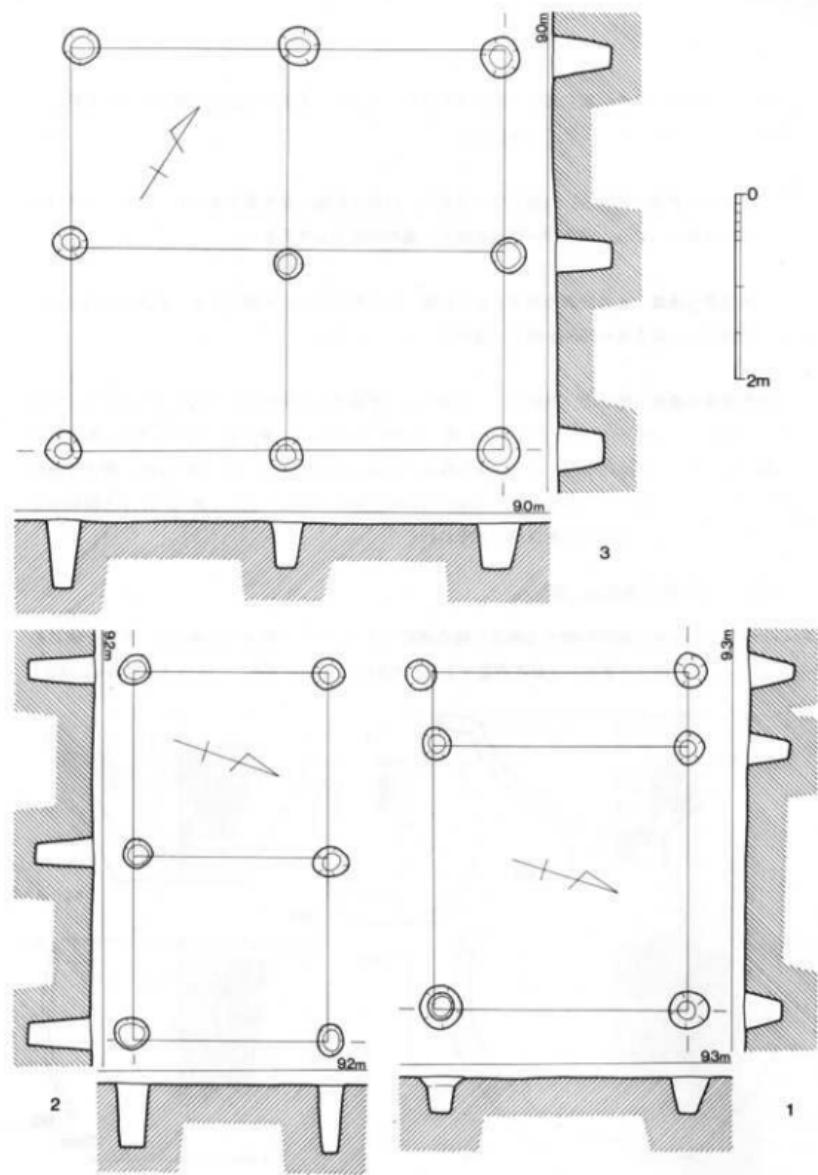
8号周溝状遺構（第56図、図版13）発掘区の西側端部から検出された隅丸長方形プランである。中軸線上での長さは6.45m×5.38m、溝上面幅0.9×1.05m、深さ50~55cmを測る。壁の断面は略垂直であり、底面は平坦である。溝北西部の底面からは、長さ1.4m、幅0.45m、深さ5cm程の長方形プランの掘り込みが見られたが中からは何も検出されなかった。溝内からは土器が出土しており、年代は、弥生時代後期前半と思われる。

出土遺物（第56図、図版24）

土器（189~193）189は内傾する鋸先口縁の高杯であり、他の4個体の土器に比して古い感じを受ける。杯部内面は丁寧なヘラ磨き調整であり、外面はハケ目に入る。口径19.4cmである。190は



第56図 8号周溝状遺構出土土器実測図(1/3, 1/6)



第57図 1~3号掘立柱建物実測図 (1/60)

手捏ね的な土器の鉢であり、口縁部を短く外反させる。全体に厚手造りであり、内面はナデ、外面底部は擦過、上半部はナデ調整である。復原口径7.8cm、器高8.8cmを測る。焼成不良品であり色調は黄橙色を呈している。191～193は甕である。191はわずかに凸レンズ状をなす底部であり器壁は厚い。胴部内面の底部は擦過の後ナデしており、上半部は横ナデする。外面は粗いハケ目に入る。192の底部は平坦で、未調整のようだ。胴部内面は指頭圧痕とハケ目が入り、外面はハケ目調整する。193は口縁部は外反し、基部内面はあまり稜が入らず丸味をもつ。口唇部は部分的に沈線が入るが一周はしない。胴部内面は丁寧なナデ、外面はやや粗い縦ハケ目を密に入れている。

5. 掘立柱建物 (第57図)

1号掘立柱建物 1間×1間の建物であり、西側に庇がつく。柱間は2.75m×2.85mを測り、幅80cmの庇がつく。柱穴は深さ45～50cmである。主軸方位はN-73°-Eである。

2号掘立柱建物 1間×2間の建物である。桁行柱間は2.1m、梁間柱間は2.0mを測り、柱穴の深さは65～75cmである。主軸方位は1号と略同じのN-72°-Wである。

3号掘立柱建物 2間×2間の建物である。柱間は、南北軸2.15m、東西軸2.35mを測り、柱穴の深さは50～70cmである。主軸方位はN-58°-Eである。

この他に1間×1間の4・5号掘立柱建物があり、倉庫か、壁を削平された住居跡の主柱穴と思われる。4号は柱間2.7m×3.05m、5号は3.2m×3.2mを測る。

IV おわりに

竪穴住居跡について

住居跡は22軒検出されたが、出土遺物などから年代を特定できるものは21軒であった。内訳は弥生時代が7軒、古墳時代が14軒であった。

弥生時代の住居跡は平面形態はいづれも長方形を呈しており、面積は18.7m²～31.9m²の間であり比較的小規模である。主柱穴は2本柱のもの3軒と四隅に4本柱となるもの2軒、不明瞭なもの2軒であった。住居跡の占地を見るといづれも発掘区西部の、中央部から北側にかけてにまとまっている。7軒の住居跡はいづれも弥生時代後期前半頃に相ついで建築されたと思われ、同一

時期には3～4軒が1単位を構成していたと考えられる。

古墳時代中期の住居跡では5世紀前半と、5世紀中頃にかけての2群に大別できよう。前者の住居跡群は8軒であり、住2、住6、住19、住21の4軒が近接してまとまり、住11、住14、住16の3軒が一まとまりしている様に見られる。これらの2小グループには各々住6と住11の如く床面積が94.6m²、75.3m²を測る。大型の住居跡が1軒ずつ所在している。7軒の住居跡はいづれも壁溝を有したもので、主柱穴は4本柱のもの6軒と2本柱のものが2軒あり、いづれも未だカマドを付設しておらず須恵器を伴わないものである。5世紀中頃の住居跡は6軒であり、いづれも壁溝を有した主柱穴4本柱のものである。15号住居跡を除くすべてにカマドが付設されており、住1、住4、住12、住15は陶邑I型式3段階に属する古式の須恵器が出土している。住10、住4、住12、住13、住15は北から南へ弧状を呈して略均距離に位置している。これらの住居跡の床面積は28.9m²～39m²で、一辺は5m～6.5mの方形プランのものが多い。これに比して一辺が7m程で、床面積は47.6m²を測るやや中型の住居跡がこれらの東側に一軒離れて所在している。この様に、5世紀前半の時期と中頃の時期の住居跡では前者の方が規模が大であり、各々の群に各1軒の大型住居跡が伴っている。最大規模の6号住居跡は北、東壁の2壁を建て直しにより拡張しているのが確認された。建て直しに際してはもとの主柱穴4本を埋めもどして、この柱穴を掘っていた。

落とし穴遺構について

7基の方形土壙が検出されたが、これらはいづれも壁面が垂直に掘られたもので、底面には逆さ杭を立てたと思われるピットをもったものが4基見られた。7基の落とし穴は、東側部分と西側端部近くに各々2基、5基から構成されている。このうち西側端部近くに位置した5基は、略等間隔で一列に並んでいるものでありこの落とし穴に添って柵をめぐらして、小動物を追い込んだ事も考えられるが、上部の削平もあって、柵列などを考える規則的な柱穴は検出されなかつた。当然のことながら落とし穴内からは遺物は何ら検出されなかつたため年代は特定できない。

周溝状遺構について

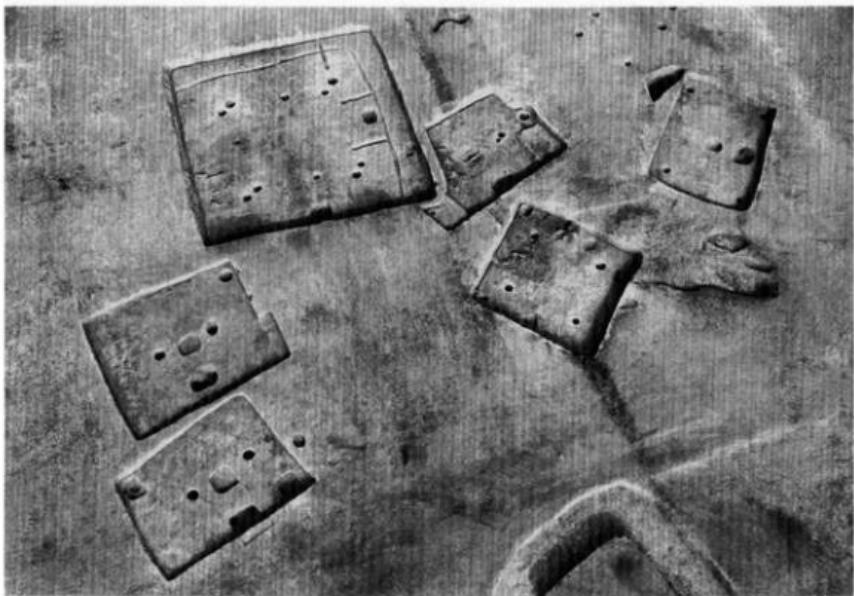
当該遺跡からは円形、方形を呈した周溝状遺構が8基検出された。内訳は円形のもの5基、方形のもの3基である。規模は7号が最も小さくて直径2.2～2.5mの円形周溝状遺構であり、5号方形周溝状遺構は最も大きく7.2×7.5mを測る。周溝の幅は0.5～1.8m、深さ0.15～1.05mである。いづれの周溝も壁は垂直に掘られており、底面は平坦である。なお、周溝内の堆積土の状況を見ると台状部に盛土があったことをうかがわせるような内側からの堆積は特に見られず外部から序々に流入した土砂によって堆積して行ったことがわかる。また周辺部の遺構の遺存状況から、台状部に埋葬施設があったのが削平されたことも考えにくく、周溝墓とは思えない。

いづれの周溝状遺構も弥生時代後期前半頃の住居跡群の周辺部に位置したものであり、集落内に所在するものは皆無である点は、かなり住居跡の所在を意識してその周辺部につくられたもの様に受けとれる。住居跡出土遺物と周溝状遺構出土遺物の両者はほぼ似通った年代の土器であり、両者は同時期に所在したものと思われる。これらの遺構が住居跡でも墓地でもないといえば、祭祀遺構と考えることができよう。とすれば周溝で囲まれた空間部分というのは隔絶された神聖な場所と受けとれよう。年代的には出土遺物から、弥生時代後期前半と思われ、円形、方形という異なった平面形態による年代の差は敢えて考える必要がなく、同時期所産のものと判断できる。

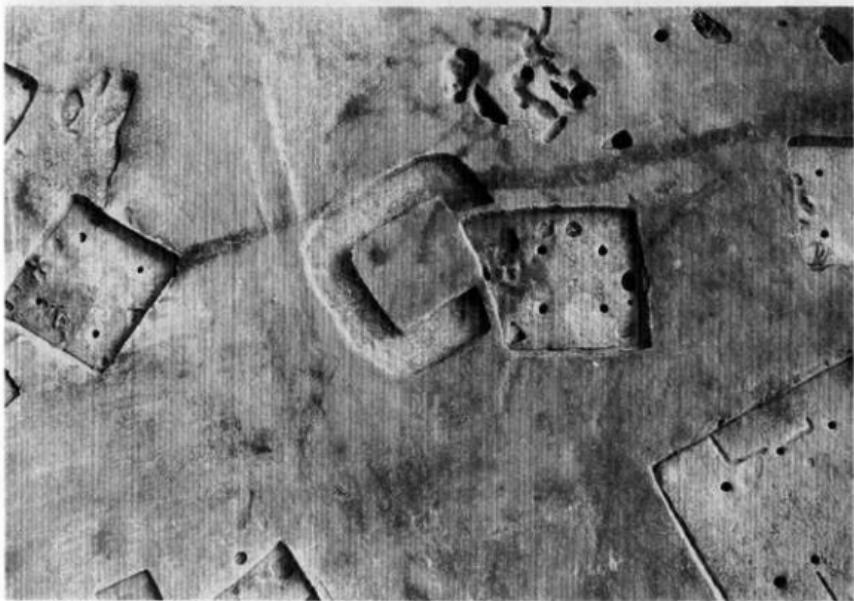
図 版



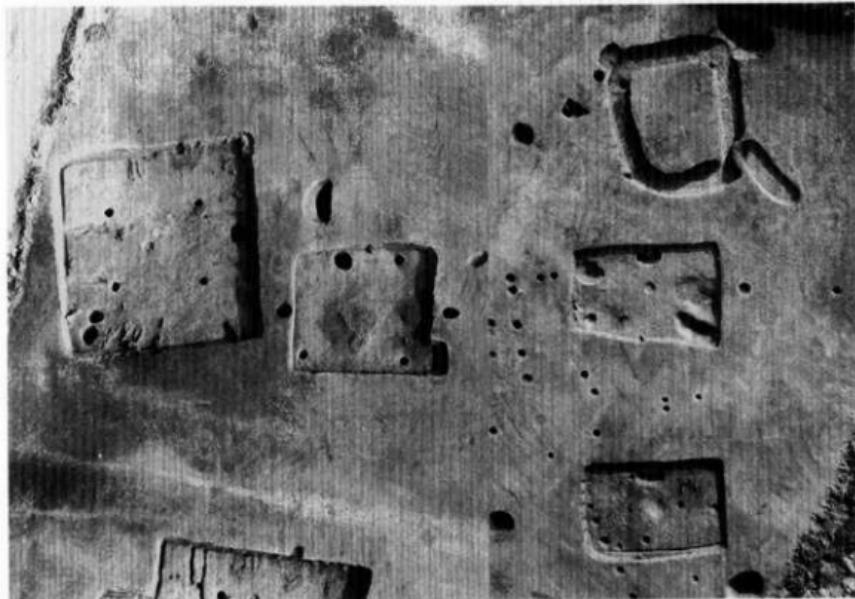
通 路 全 景(空中撮影)



3~6, 8・9号住居跡(空中撮影)

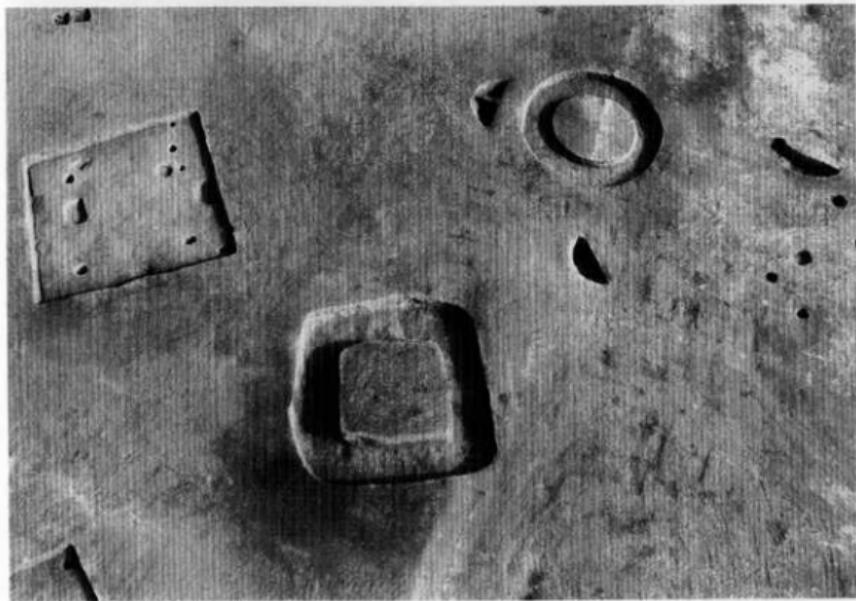


5号周溝状遺跡, 12号住居跡周辺(空中撮影)

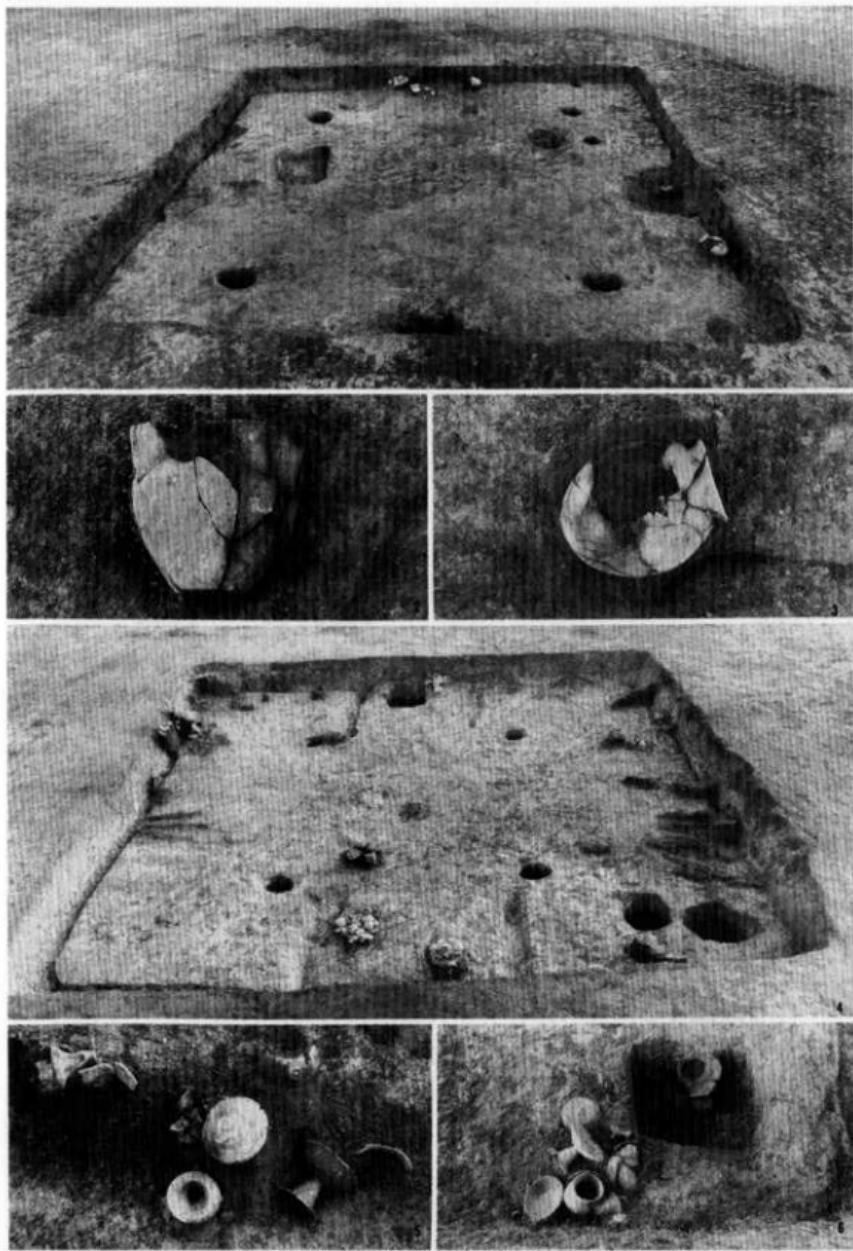


2·7号住居跡

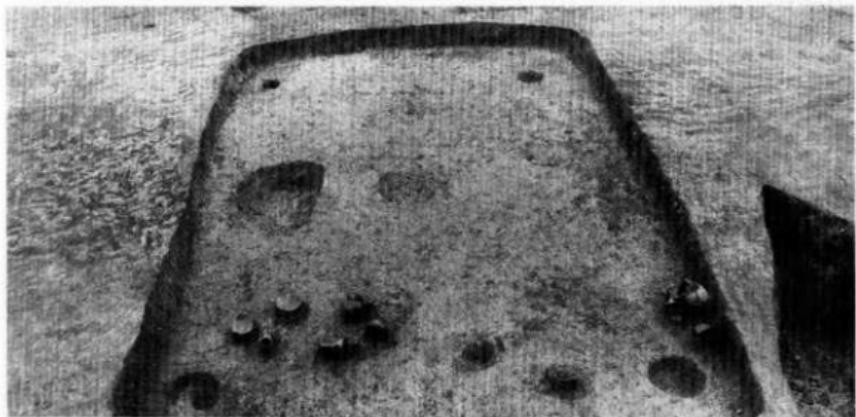
8号周溝状造構, 17·18号住居跡



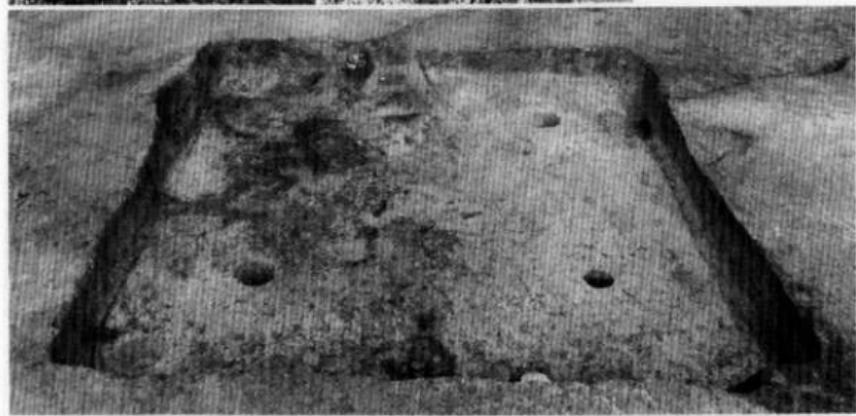
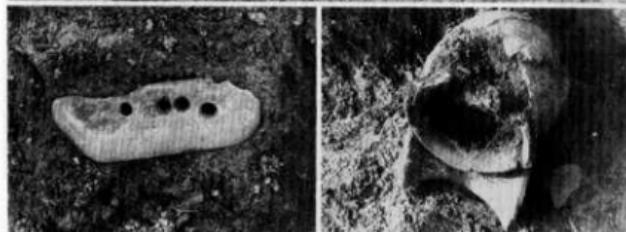
1号住居跡, 2·3号周溝状造構



1 1号住居跡, 2-3 1号住居跡土器出土状態, 4 2号住居跡, 5-6 2号住居跡土器出土状態

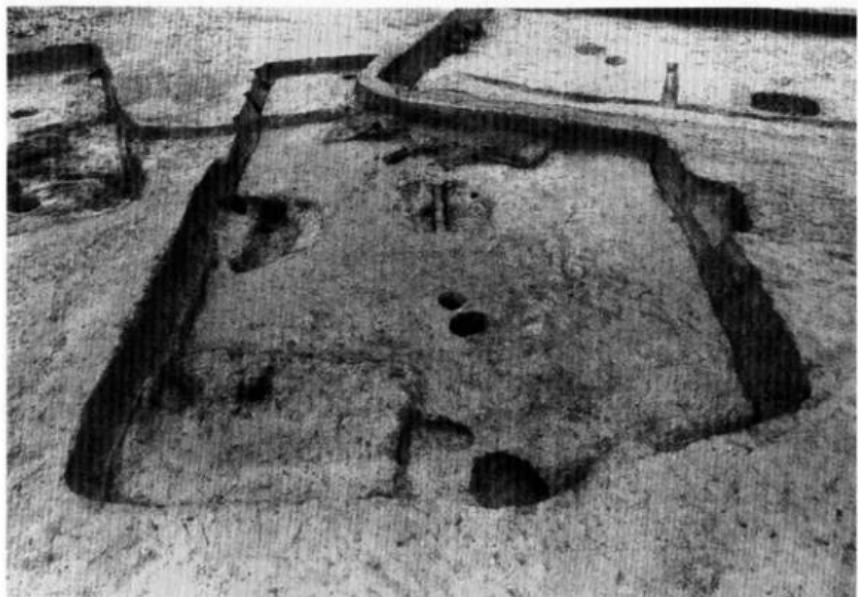


3号住居跡
石庖丁・土器出土状態

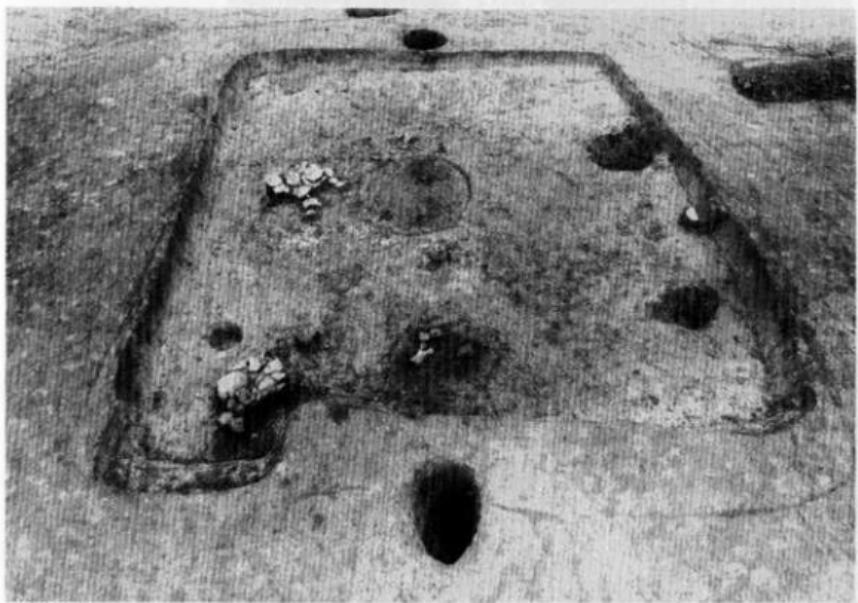


4号住居跡
カマド
土器出土状態

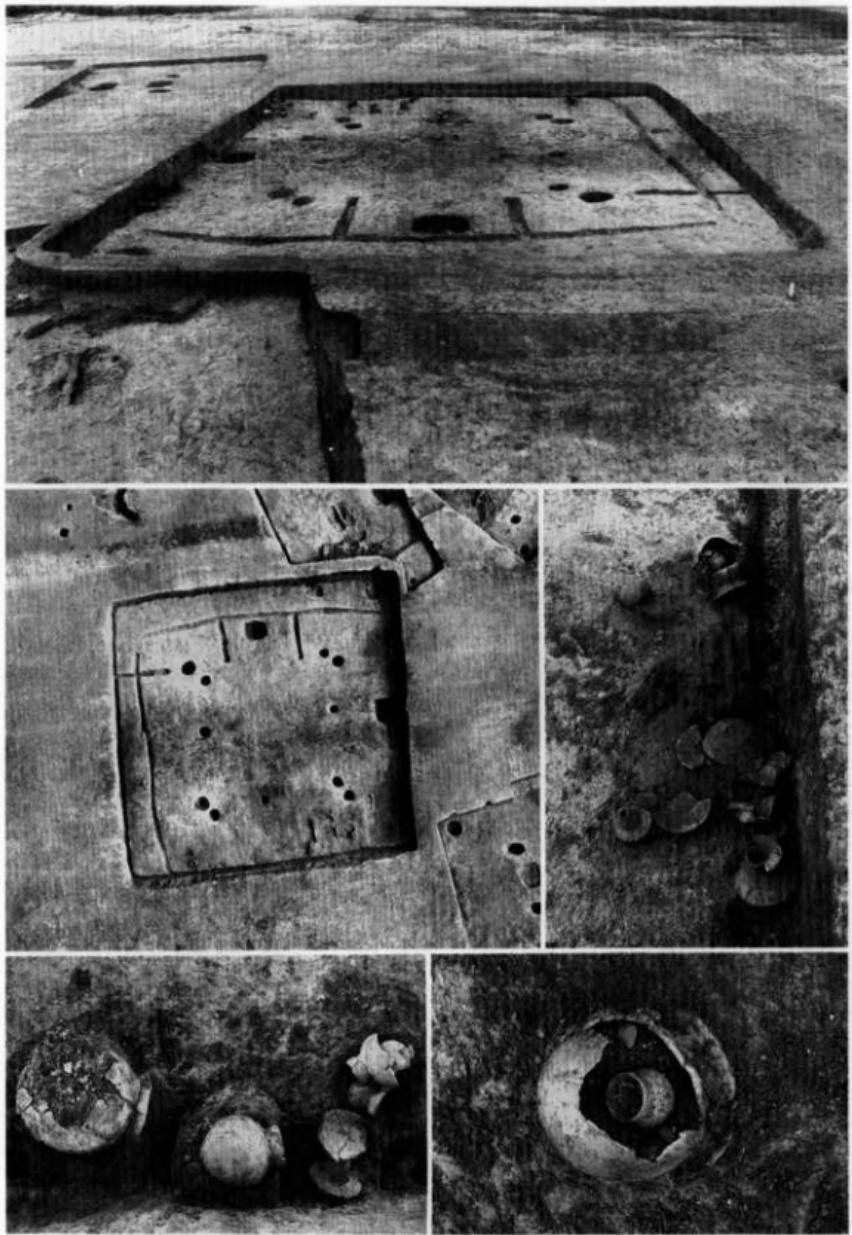




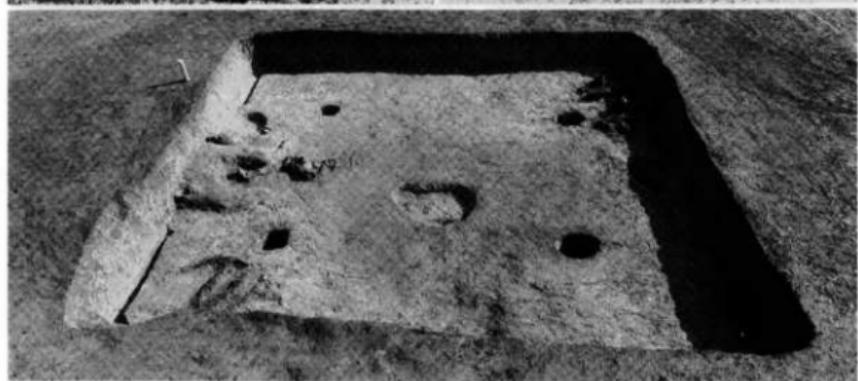
5号住居跡



7号住居跡

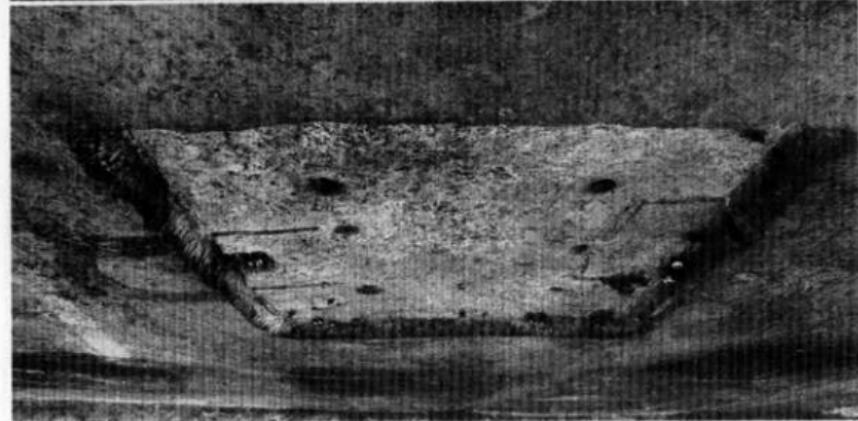
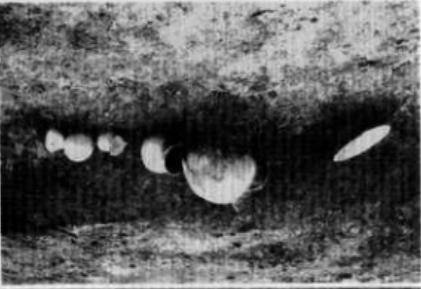
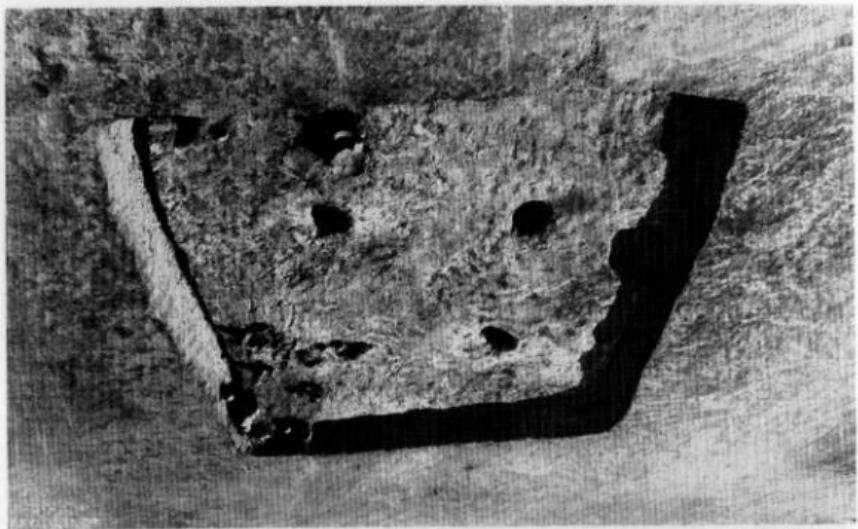


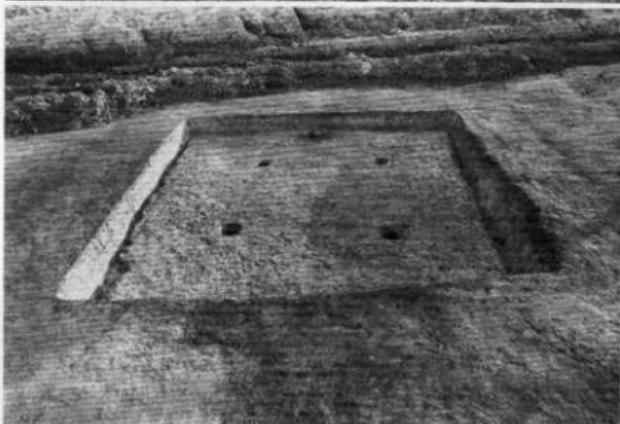
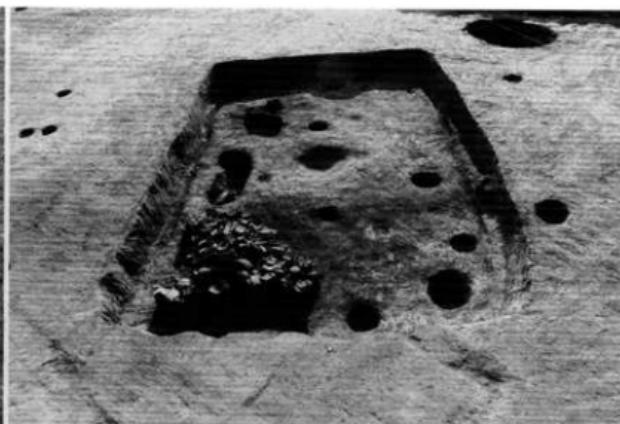
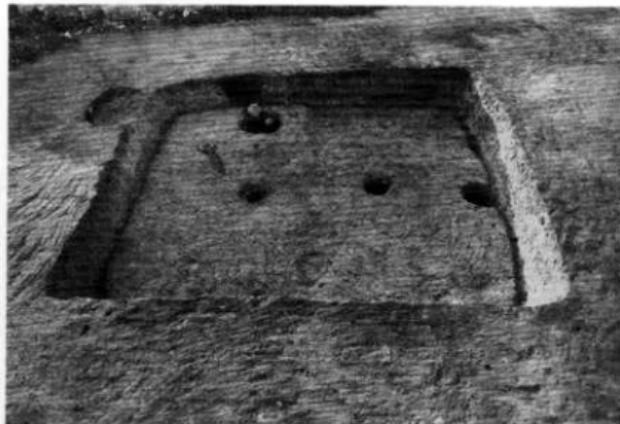
6号住居跡と遺物出土状態



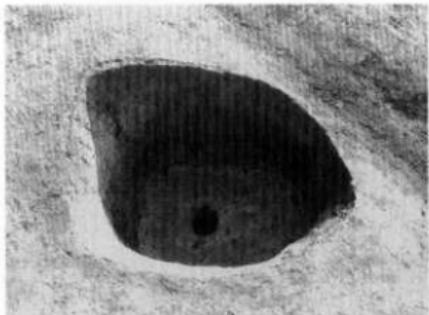
上 10号住居跡，中 10号住居跡内土器出土状態，下 13号住居跡

上：11号住居跡、中：11号住居跡内土器出土状態、下：22号住居跡

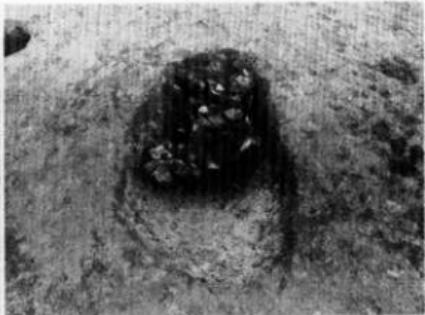




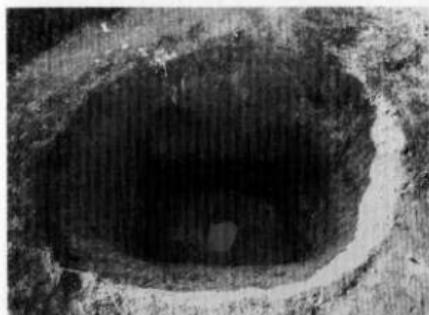
左・上 15号住居跡 右・上 18号住居跡
下 15号住居跡 下 同土器出土状態



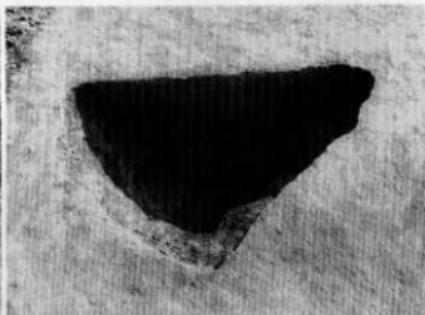
5号土壤（落とし穴）



8号土壤



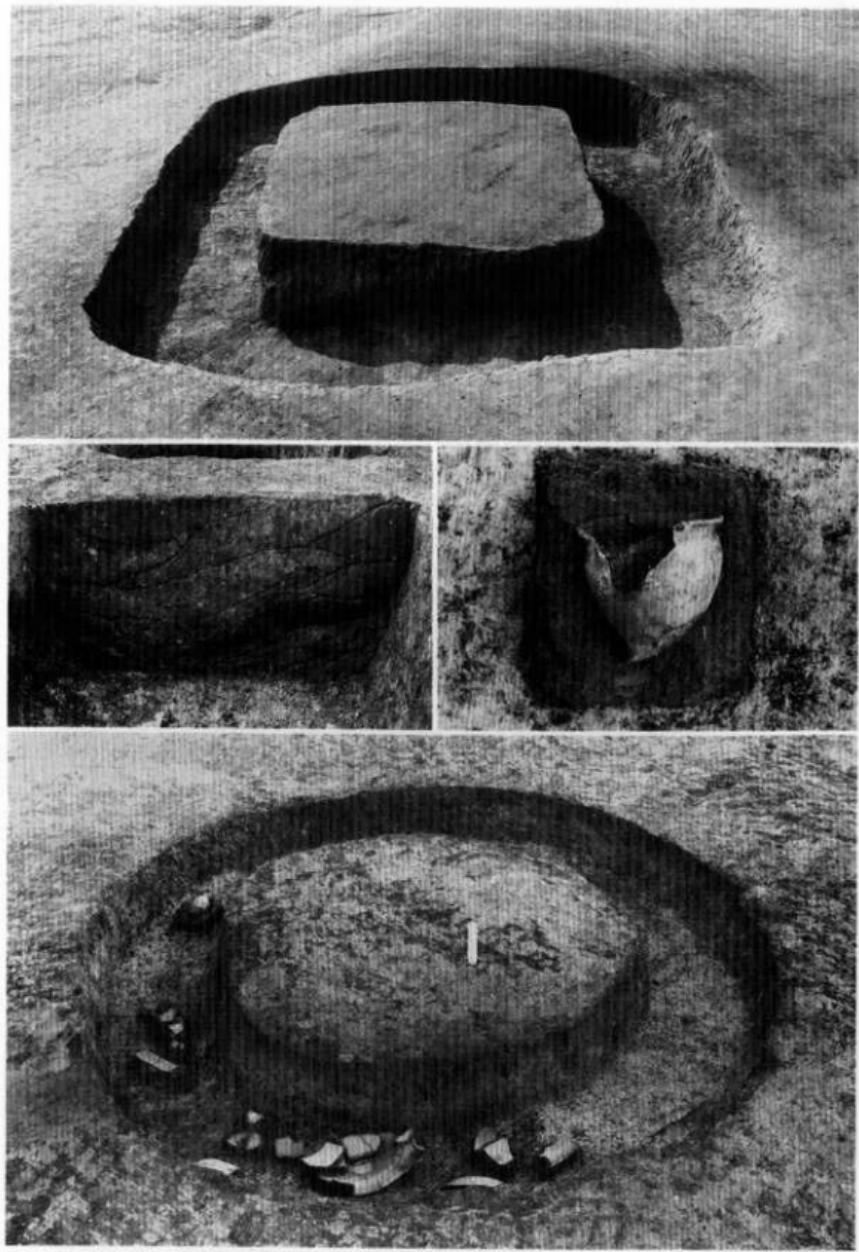
13号土壤（落とし穴）



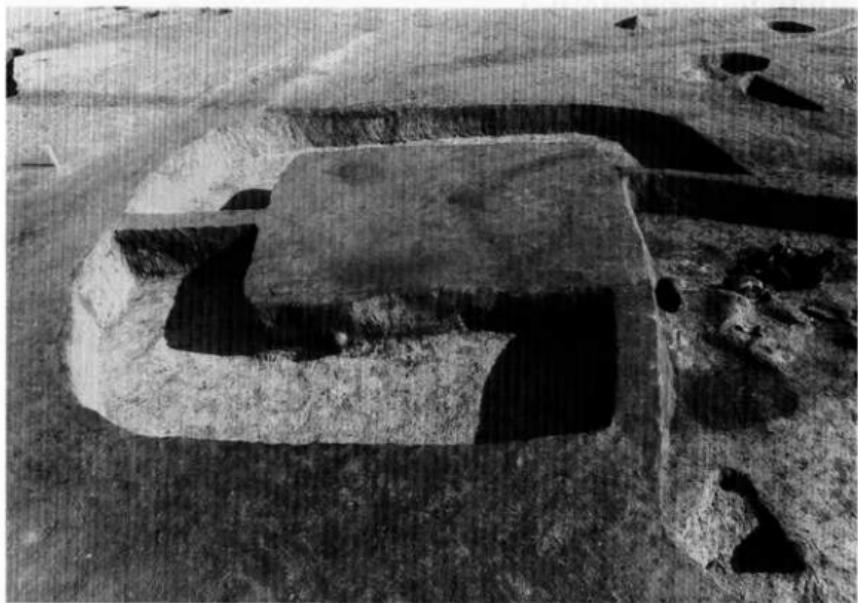
28号土壤



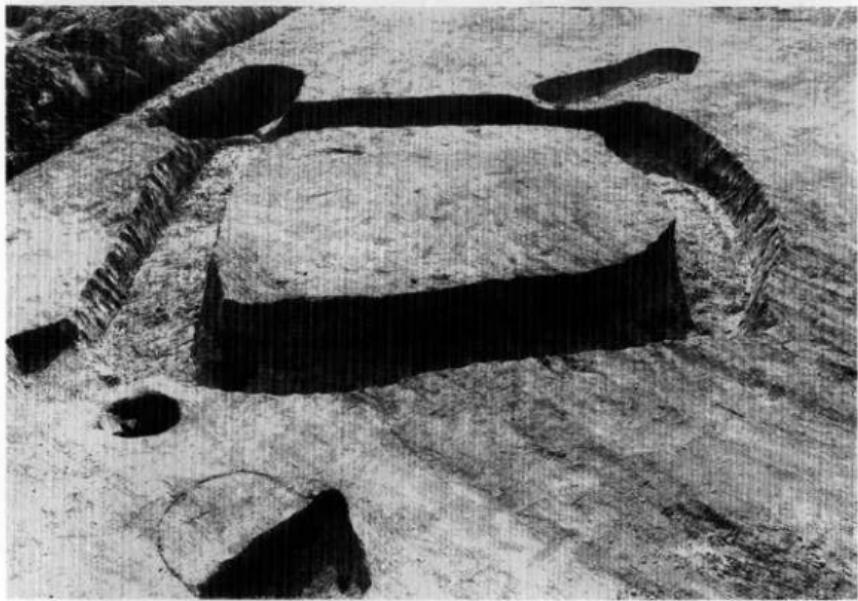
2号周溝状造構



上 3号周溝状遗構，中左 同溝断面，右 4号周溝内土器，下 4号周溝状遗構



5号周溝状造構



8号周溝状造構



6



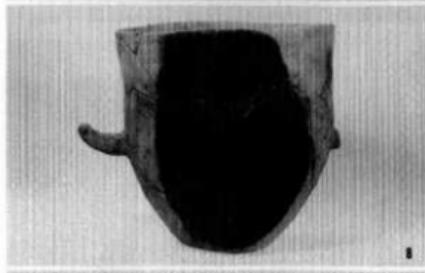
12



7



13



8



14



9



15



10



16

